

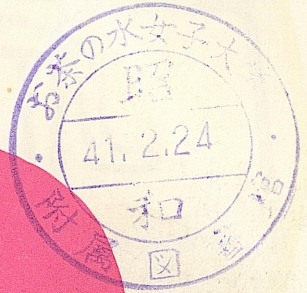
家庭・保育所・幼稚園

# 幼児の教育

第六十五卷 第三号

日本幼稚園協会

3



Horiuchi

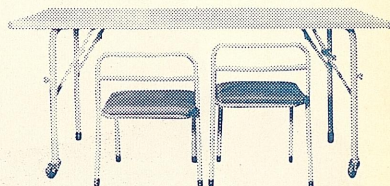


# 椅子と机は 幼児の健全な発育のために大切です



●幼児の椅子と机は、たいへん重要な役割をもっています。それは、子どもの生活の中で正しい姿勢を習慣づける意味があるからです。幼児のせき柱は柔らかくて安定性がないので、長い間悪い姿勢でいると生理的に湾曲してしまうことがあり、のちに身体的な障害を起こす原因ともなります。ですから幼児期に与える椅子や、机は、正しい姿勢やその態度を養うように考えられたものが望ましいわけです。

●また、とくに現代は幼児の発育がいちじるしいので、その発達に即した研究が必要です。椅子と机の関係も、現代っ子の本位に合わせて寸法や形のバランスがよく計算されたものでなくては、理想的とはいええないでしょう。このように、椅子と机は、単に子どもの生活の中で、道具や機能としての役割を果たすばかりでなく、健康維持や管理の上でも重要な意味があるわけで、よく選んで与える必要があるのです。



●キンダーチェアとキンダーデスクは、現代っ子のために作られた椅子と机です。

## キンダーチェア

高さは、幼児が安定して座れるように、床から座台までの寸法を、③年少用26cm・④年長用29cm、と決めました。

正しい姿勢でかけられるように、背もたれの角度は110°～115°と決め、骨盤を確保する高さにしてあります。

パイプ製ですから、丈夫で、しかも軽く、幼児でも持ち運びが容易です。

重ねられるようにデザインしてありますから、一度にたくさんさんの運搬が可能で、せまいところにかたづけることもできます。

## キンダーデスク

脚が折りたたみ式ですから、積み重ねてかたづけることができます。

脚の片側2本にキャスター(自在車)がついていますから、移動に便利です。

大きさは60cm×120cm×高さ52cmで、キンダーチェアと寸法をマッチさせてあります。

## ●定価

キンダーチェア (A・Bとも) 各 700円  
キンダーデスク 6,500円

# 幼児の教育 目次

第六十五卷 三月号

表紙 堀内 誠一

幼稚園九十年の年に当り……………多田 鉄雄 (2)

幼児の創造性の教育(2)

創造性の教育の方法……………恩田 彰 (6)

思い出二つ三つ……………新庄よしこ (11)

叙勲の榮譽に浴して感激の中から……………林 昶子 (14)

学年末「たのしい会」のもち方……………清水エミ子 (18)

私のこころみ☆幼児の生活から取材したお話……………鈴木 正子 (22)

教材研究

動くおひなさまのアイデア……………佐藤 諒 (27)

ちえおくれの幼児のための教材……………西山 恭子 (31)

児童発達講座②

幼児後期の運動能力について(1)……………岡本 卓夫 (36)

五才児の記録③

磯部 景子  
堀合 文子  
津守 真 (45)

のりものはくらんかい……………岩井 富枝 (58)

# 幼稚園九十年の年に当り



多田鉄雄

明治初年にキリスト教宣教師によって設けられたといわれる幼児保育施設、明治八年に京都の柳池校に設立された幼稚遊戯場はしばらくおき、正規に幼稚園が創設されて、ここに満九十年を迎えるに当り、現在に至る発展・変遷を簡単に跡づけるとともに、できれば今後の問題にも若干触れて見たい。

すべてのことがらに通じてそうであろうが、理論と実際とはつねに必ずしも一致しないということがある。一言にしていえば幼稚園もその例に洩れなかったといえる。一般に「戦前の幼稚園は一部富裕階級の子弟のための施設になっていた」といわれているが、一口にこのようにいい切ることは、必ずしも正しいとはいえないという点を先ず指摘しておきたい。たしかに、幼稚園の数が少なかったが故に、これを利用し得るのは一部の限られた人々とどまっていたし、最初の幼稚園であり、すべての点においてそこから学ぶのが当

然であつた東京女高師付属幼稚園は、自らがその設備、施設の完備、教育方法の向上を目指す使命が課せられていたので、後に続く多くの幼稚園の模範とされたのであるが、そこに子弟を入園せしめたのは、幼児教育施設における教育の価値に目ざめた一部の知識階級・富裕階級の人々であつたし、各府県の師範付属幼稚園もその小学校に連なっているという関係からも、大体において中流以上の一部の人々の目指すところであつた時代が長くつづいたことは当然のことであつた。

また多くの私立学校がそこに付設していた幼稚園も、それが私立学校である性格から、これまた一部の人々の目指すところであり、父兄の負担額も大きくて、一般庶民階級の人々から高嶺の花と眺められてきたことも事実であろう。在教を目的として設立されたキリスト教会付設幼稚園にしても、その意図するところは一部階級の子



弟の教育ではなかったが、必ずしも庶民階級の人々によって利用される施設にはなっていなかった。

一方、上記の師範付属幼稚園はもとより、一般の公立小学校に併設された幼稚園にしても、独立公立幼稚園にしても、その経費を、国はもとより、府県も市町村もほとんど、これを負担しなかったが故に、貧困家庭の子弟にとって閉ざされた門になっていたことは、これまた否定し得ぬところであつた。しかしこうした事情はこれをひとり幼稚園のみ切り離して眺めるべきでなく、例えば小学校の義務教育の普及の状況なども照らし合わせて考えるべきである。

幼稚園創設二十年後の明治二十九年には幼稚園数は二二三園（官公立一六四）であり、四十年後の大正六年には六七七園（官公立二四九）、大正十五年に一、〇六六園（官公立三七四）、創設六十年目の昭和十一年に一、九四四園（官公立六〇〇）となっている。これに対し小学校は明治三三年に至って、四年の義務制が制度には確立したとはいえ、女子の就学率はまだわずか五〇％程度であり、漸く明治四十一年に義務制が六年に延長されたような実情であつた。このことは義務教育すらその充実に大きな努力を必要としていたが故に、幼稚園の健全な発展——それについては後述するところを参照——に国以下が力を及ぼすことは不可能な状態だったということである。すでに明治四十年頃から私立が公立を凌駕し、昭和十一年では公立の約三倍に達したことは右のことを実証しているものである。

るし、同時に元来、私立はその経営上、都市に集中して設置されてきていることから、幼稚園の所在するところでは相当広い範囲の階級の人々の利用し得るところであつたにせよ、一般的に幼稚園は先ずその偏在性こそが指摘されるべきであるし、この事情は戦後の現在においても多く変わっていない。しかし岡山市のように全市の公立小学校が幼稚園を付設していた事実、地方の中小都市には託児所的役割を果たしていた幼稚園も存在していた事実、いわゆる貧民幼稚園として明治三十年代に三崎町幼稚園、二葉幼稚園が設立された事実も想起する要があろう。

このように前おきしてから、幼稚園制度、幼稚園理念の変遷を略述するに、明治九年に東京女子師範付属として創設された幼稚園の趣旨は「学齡未滿の小兒ヲシテ天賦ノ知覺ヲ開達シ固有ノ心思ヲ啓蒙シ身体ノ健全ヲ滋補シ交際ノ情誼ヲ睦和シ善良ノ言行ヲ慣熟セシムルニ在リ」とあるが、その幼稚園規則中に「時宜ニ由リ満二才以上ノモノハ入園ヲ許シ」とあり、実際に若干のこのような年齢の子どもも当初は入園をゆるされて、いわゆる員外開誘室（特別保育室の意）で保育されていたこと、および明治十五年の文部省示論に「文部省直轄ノ幼稚園ハ務メテ園制ノ完全ナランコトヲ期シ而シテ地方ニ於テ設ケル所ノモノモ概ネ之ニ模倣スルヲ以テ規模頗ル大ナレバ人ヲシテ都会ノ地ニ非ザレバ之ヲ設ケルコト能ハズ又富豪ノ子ニアラザレバ之ニ入ルコト能ハザルノ感アラン然レドモ幼稚園ニハ又別

種ノモノアリ都鄙ヲ論ゼズ均シク之ヲ設置シ、貧民力強者等ノ兒童ニシテ父母其養育ヲ顧ミルニ暇アラザルモノノ之ニ入ルコトヲ得ベキモノトス」とあり、幼稚園が保護的機能も果たすべきことが示されている。また明治二十五年には東京女高師（元女子師範）付属幼稚園に分園が設けられ、ここで資産のない家庭の幼児が週三十三時間以上四十三時間以下の保育時間で保育されたのである。

また二十年代の東京の一私立幼稚園の保育日誌を見ると、夏季も七月のお盆から約二十日休園するのみといった例もあった。しかし明治三十二年の幼稚園保育及設備規程、翌年の小学校令においては「保育の時数（食事時間を含め）は一日五時間以内」とされ、ここでは保護機能が一步後退していることを知る。それと関連してであろうか、前記の分園は明治三十三年までで廃された。しかし一方では上述の三崎町幼稚園、二葉幼稚園が生まれているのである。

明治四十四年になると小学校令中幼稚園の項が一部改正され、「保育の時数は管理者又は設立者に於て之を定め、府県知事の認可をうるべし」となり、ふたたび保護的機能を果たす幼稚園の存在を認めるに至っている。

はじめて独立の勅令として公布された大正十五年の幼稚園令では「文部大臣ノ定ムル所ニ依リ三才未満ノ幼児ヲ入園セシムルコトヲ得」と規定して将来託児所をもこの幼稚園令で律する意図が明白にされ、同令に関する訓令は、それを具体的にうたっている。以上が

必ずしも空文に過ぎぬものでなかったことは元東京学芸大学長木下一雄氏の次の記述が示している。「託児所を本旨とする幼稚園にあっては勿論休業日なきを本体とすべく、また幼稚園が小学と異なり、家庭生活の延長であり、或は家庭に代つて教育を行なう場所として考えるならば、酷暑、嚴寒の候と雖も、環境及び養護上の注意を周到にして、休業日を無くするも亦可である。現幼稚園の夏期休業の如きは八月一日に始まり、八月二十日に終るものが多いのである」（昭和四年刊「幼稚園實際保育学」による）

また同年の第一回全国児童保護事業会議においては幼稚園と託児所との関係が論議されたのであったが、当時の文部省普通学務局学務課長菊地豊三郎氏は「託児所と幼稚園は全然同一であり」「幼児保育制度を凡てに行き渡らせたい」ために「内務省と協議し」幼稚園令を公布したと説明したのである。したがって幼稚園の健全なる発達とは大筋からいって右のような趣旨のものであるはずであった。しかし社会の進展に伴って勤労家庭から幼児保育施設要望の声が益々、高ま行つたにも拘らず、国として適切な指導・施策がなかったために社会施設としての託児所が激増し、この側から託児所令の發布が熱望されてきたのである。かくて昭和十六年ごろには教育審議会答申の趣旨にそつて、満四才以上は就学前教育施設として統一して凡て幼稚園となし、三才以下は養護を主とする施設として之を保育園（仮称）とすることが立案されたが戦争の苛烈化のた

め実現されなかった。

終戦後は昭和二十年末、大日本教育会幼児保育部会から昭和二十二年には関西連合保育会、全日本保育連盟から、さきの教育審議会の趣旨と同様の建議が関係官庁に提出されたのであったが、結局は保育所は児童福祉法の中で別個に規制され、幼稚園はその特殊性はみとめられつつも学校教育の最下段階として学校教育法の中に包括されて現在に至っており、その数も戦時中ほとんど休廃園したものの戦後六年にして昭和十七年の園数二、一一三を凌駕し、昭和三十九年では七、八六九園、五才児中幼稚園在籍者が三九%（保育所は一六%）に達している。

しかしここで指摘せねばならぬことは上述の学校教育法中の幼稚園の構想が「アメリカ教育使節団報告書」が「幼稚園を小学校に付設して初等教育の一部として重視するよう——ここで幼稚園とはアメリカで行なわれている五才児のそれが考えられている」要望していること、教育刷新審議会の建議（昭和二十二年）が「五才以上の保育を義務制にすることを希望する」とあることと対応しており、満三才から五才までという現行規定は、必ずしも右のような発想から直接に結果するものでないという点であろう。

つぎに今後の問題に触れたいが、すでに紙数もつきたので一、二これを指摘するにとどめる。第一は、すでに他の機会でも言及したことであるが、幼稚園が学校教育法に含まれた以上、逆にこの学校

なる概念は従来より広い概念であることが明らかにされねばならぬ。幼稚園教育の概念は従来の学校教育という概念では律し切れぬからである。その意味で例えば「教育課程」などという用語はむしろ避けるべきであろう。

第二に幼稚園の保護的機能は同法によって排除されたと見るべきであるかの問題、そうであれば「保育に欠ける児童」を対象とする保育所がすべてこれを担当して行けるかの問題である。第三に一元化の問題であり、山下俊郎教授は雑誌「教育調査」（昭和四十年十一月号）において、先般の文部・厚生両省の共同通達をこの点での一歩前進であると認め、幼稚園に関して「(1)保育所との一元化の方向をとる。(2)広く保育の機会を幼児に与えるために義務化の方向をとる。(3)現段階では現行法による幼稚園、保育所を認めることを前提として、できるかぎり多く設置し、これら凡ての施設の保育内容が実質的に一元化されるべきこと」を主張されたが、これは全く同感である。しかし一元化される場合の青字真が明白に作られていて、それが今後の目標になるのであれば、両施設とも適正な発展の道を進んで行けぬのではないかということである。最後に幼稚園七年計画、保育所拡充計画により、五年後には前者は三九%から六〇%の幼稚園修了児、後者は現在の一万施設が一万五千になるのであってみればこれらの幼児を保育する教諭、保姆をいかにして養成し、いかにして確保するかの問題である。



## 幼児の創造性の教育

(2)

# 創造性の教育の方法

恩 田 彰



### 一 創造性の開発と育成

創造性の教育には、二つの側面が考えられる。

第一は創造性は開発されるということである。創造性を養うということは、子どもにないものを与えるということではない。人間の生命そのものは創造的である。子どもの自発的活動は、そのままが生命の働きであり、創造的である。しかし子どもは成長するにつれて大人の考え方や社会の行動様式という型にはめられ、しだいに創造的でなくなる。つまり「しつけ」または「教育」によって、子どもの創造性の開発を抑圧していることが少なくない。そこで創造性の教育というのは、子どもの持っている可能性を実現させることであるといえる。

第二は創造性は育成されるということである。創造性の教育に

は、可能性としての創造性を発揮させることにとどまらず、創造力としての創造性を伸ばしていく面がある。このために創造性はある程度訓練によって高められていくのである。子どもは好奇心が強く、この好奇心すなわち新しい経験の欲求が、科学的な知識と技術の教育訓練をうけて、科学者として育っていくのである。すなわち好奇心はマックレオド (MacLeod, R. B.) のいうように、探究の原動として大切であるが、それがそのまま価値あるものではない。訓練された好奇心が大切なのである。単なる好奇心を科学的な探究心にまで高めていくことが大切なのである。そこで好奇心を経験を通して訓練していく必要がある。その意味で指導が必要である。

### 二 思考と想像

創造的思考には、思考と想像の両方の働きが必要である。創造活動には、想像の活動がさかんであることが大切である。まず新しいイメージ、アイデアが浮んでこなければならぬ。それと同時にそのイメージやアイデアをより現実的な、具体的なものにしていくためには論理的思考が必要である。

すなわち、創造的思考は、想像の極と論理的思考の極との間の往き来によって成立する。したがって創造的思考を活発にし、高めていくには、想像力を高めるとともに、論理的思考を訓練しなければならぬ。しかし想像力と論理的思考力とが別々に育てられ、訓練されるのではなく、この二つの機能が融合するように訓練していくべきである。幼児の場合は、想像力がとくに著しく発達するので、この能力を十分に伸ばしてやる必要がある。その場合実際にはどうするかというと、子どもに創造活動を行なわせることによって、想像力と思考力の統合をはかり、それによって創造性を高めていくのである。

創造性は文化によって規定される。子どもの文化との接触が、低次の文化から高次の文化へ、また子どもの文化から大人の文化へと高められていくにつれて、創造性が発達していく。創造的思考を訓練するには、一つの極である想像力を活発にさせるとともに、基礎的な知識や技能を身につけさせ、論理的思考がしだいにできるようにしていく必要がある。

幼児は想像力が旺盛活発であるが、この育成にはとくに注意す

る必要がある。幼児の空想は不健康なものとして、これを早く脱却させようと思えるべきではない。ごっこ遊びや空想遊びというのは、子どもの正常な活動である。むしろこの時期には遊びにおいて十分に空想の生活を楽しませることが必要であり、これによって子どもの想像力が伸びていくのである。

### 三 創造的思考の訓練

創造性を養うには、子どもに創造活動を行なわせることが必要である。図画、音楽、工作、演劇などにおける創作あるいは発見や発明を行なわせるのである。創造ということは、新しいものを発見し、発明し、創作することであるが、その場合、考えるという思考の働きが入ってくることは前にのべた通りである。しかし最も大切なことは、考える方法を身につける、または自分で考える態度と習慣を身につけることである。

そのさい問題に直接取り組み、問題を解決しようとして工夫し、考えることが必要である。そこに創造も可能になってくるのである。既成の知識や技術は、過去において問題がうまく解決された時の方法や手段であった。しかし社会はどんどん変化し、以前と同じ条件の事態や問題にぶつかるとは限らない。むしろ事態は常に新しくなり、問題は常に新しくなるのが実状である。そこで既成の知識や技術は、すぐ役に立たなくなるのである。そこで知識や技術を教授するよりも、自分で問題を解決する方法や態度

を身につけさせることが必要である。さらに与えられた問題を解くだけでなく、新しい問題を発見することもこれに劣らず大切である。創造的思考という場合、与えられた問題の解決法を見出すだけでなく、新しい問題を発見することが重要なのである。私たちはいろいろなことを知っており、あるいは知っていると思っている。そこで改めて考えてみるということをしないことが多い。

「何故そうなのか」「それでよいのか」「もっといい方法がないか」と一々考えようとしてもしない。問題を外から与えられ、解決をせまられて考えるのではなく、内から問いを発し、分りきったことと思われているものに疑問をいだき、すでに解決されていると思われる事態の中に、新しい問題を見つけていくことが、創造的に思考するということである。だから本当に「考える」ということは、与えられた問題を解くことであるよりも、問題を見出し、それを解決し、さらに新しい問題を見つけていく連続の過程であるといえよう。そこで創造的思考では、質問に答えるということよりも、質問を出すということが大切である。そこで創造性の育成にとって考えるべきことは、子どもが「これは何」「何故なの」「どうして」とたずねることをうさがらずに答えてやるとともに、そういう質問がたくさんでるように、しかもいい質問ができるように積極的に指導していきたいものである。

#### 四 基礎的な知識や技術の習得

創造するためには、単にアイデアを出すだけでは物にならない。そのアイデアを現実化し、具体化しなければならない。それには基礎的な知識、経験、技術が必要である。数学の問題を解くには、基本的な定理や公理を知っておく必要があるし、作曲をやるには基本的な基礎理論や作曲技法を身につけておかなければならないし、絵を本当にかくためには、絵具の使い方、色彩の出し方、またはデッサンを学ばねばならない。詩をつくるにもある程度の形式は身につけておかねばならない。物理学における新理論や新事実も、突如としてあらわれるものではない。それには専門の基礎的な知識体系と実験技術の習得が必要である。したがって創造活動を行なうには、しっかりと基本的な知識と技術と、それに基づいたいろいろな経験をつんでおくことが必要である。

その場合大切なことは、その基本的な知識や技術の習得は、それ自身が目的ではなく、創造活動を促進するための学習でなければならない。たとえば、ある技術を学ばせてから、それをいろいろな実場面に適応させてみる。そして技術の改むべきは改めさせ、しだいにより高度の創造活動に活用させるようにしむけていくのである。知識を習得させる場合にも、それを丸暗記させるのではなく、事実にあてはめて、果してそうなのか、一々たしかめていくやり方をとらせる。内容を単に理解し、記憶するというやり方ではなく、自分で考え、探究していく態度や方法を身につけさせることが必要である。



## 五 発見 学 習

教育には、教えることのできないものがある。それは子どもに発見させ、発見のしかたを学ばせ、発見の喜びを味わわせ、それによって好奇心をのぼし、創造的に未知の世界を探索していく人間を育てるやり方である。このやり方では大人が教えてやるのではなく、子どもに気づかせるようにするのである。これが発見学習である。

この発見学習は、最近教育界にその重要性が注目されるようになったものであるが、やろうとすることは決して今までにない新しいものというものではない。この発見学習は、過去の問題解決学習の発展したものと考えることもでき、しかも系統的学習をそれに含んでいるものである。おもしろいことにこの発見学習は、その目的こそちがうが、わが国で古くから行なわれている禅の指導でも行なわれているのである。学習の中には、本を読み人の話を聞いて理解する学習と、自ら体験を通して発見する（気づく）学習とがあるわけである。この発見学習については、ブルーナー（Bruner, J. S.）がまとめた「教育過程」の中にその意義が強調されている。ここでは創造性の開発との関連において、発見学習の問題についてのべてみよう。

科学の第一線で活躍している物理学者の研究態度と、学校で子どもが物理を学習している態度には、基本的に共通するものがある。

そこで子どもが物理学を勉強するときには、物理学者が物理学を研究するのと同じようなやり方をとることが望ましいわけである。そういう意味で先生が子どもに科学の基本的概念を教えるよりは、それを子ども自身に発見させていくのである。しかも発見学習を成功させるには、発見の喜びを味わわせることが大切である。この発見学習は初等・中等教育のみならず、幼児教育においても重要である。

ブルーナーらがのべている重要な仮説に「どの教科でも、知的性格をそのままにたもって、発達どの段階のどの子どもにも効果的に教えることができる」というのがある。たとえば現代物理学の最先端を行く「相対性理論」や「不確定性理論」も、教え方によっては、どの学習段階にある子どもにも、わかりやすく教えることができるというのである。さらに勉強を早くはじめればはじめるほど、それを高次の段階で、もう一度学習するとき、その学習がより確実しかも容易に学習されるというのである。そこで教育の仕方が適切であれば、早期教育は望ましいということになる。たとえば、子どもに統計を理解させるのに、クジをひくゲームで、まず偶然性について直観的に発見させる。それから統計的な計算をさせて、確率の概念をつかませるように指導していくのである。一種のラセン形教育である。同じ種類の内容を繰り返して学びながら、しかもその内容の理解は高次のものへ高められ、また深められていくのである。

学習を動機づける方法として、外的動機づけ（ほめたり、叱ったり、または競争や協力をさせる仕方）と内的動機づけ（自分の欲求や興味から学習意欲がでること）とがあるが、この発見学習にとって大切なことは、内的動機づけであり、自ら発見する喜びを味わわせることである。これは他人からほめられ、賞を与えられるというものではなく、自分が未知の世界を発見したという純粹な喜び、すなわち自然的賞というべきものである。

最近科学者の中に直観的思考の重要性を述べているものが多くなってきた。しかし一般には無視されてきたものである。直観的思考については、科学的にはまだ十分に究明されていないが、その性質を明らかにするために、それに対する分析的思考と比較して考えてみる。分析的思考（論理的思考といってもよい）は、その一步一步がはっきりわかっている、それを他の人に十分に説明できるのが普通である。そして思考の流れを意識して、思考を進めることができる。解決に時間がかかるが、方向は大体においてまちがいはない。

これに対して直観的思考は、はっきりした段階を追って進まない。時に飛躍するのが特徴である。はっきり表わせないが問題全体をぱっとつかむといったわかり方をする。そして思考過程をほとんど意識しないで解決する。その解決は早く正しいこともあるが、時によりまちがっているかもしれないという危険性がある。直観的思考で得た解決法またはアイデアは、それだけでは十分で

はない。分析的思考によって確かめられる必要がある。すなわち直観的思考と分析的思考は、それぞれの機能はちがっているが、相互に補われなければならない。いわゆる創造的思考というのは、この二つの思考が統合されたものということができる。

その点今までの学校教育では、直観的思考は分析的思考と比べて、あまり重視されてこなかったように思われる。

そこでブルーナーたちは、子どもに当て推量をもっと奨励してもいいのではないかと提案している。科学的思考の中で、独創的なアイデアを生み出す時、初めは当て推量が行なわれることが少なくない。

また私たちの日常生活においても、不完全な知識に基づいて、当て推量しなければならぬ状況がたくさんあるものである。

しかし当て推量は、必ず検証され、確認されなければならない。そうしないと、あてにならない物の見方を奨励することになるからである。しかしこの当て推量をきびしく禁止すれば、直観的思考だけでなく、あらゆる思考を抑制してしまうことになる。

そこで、直観的思考の能力を伸ばすためには、当て推量を適切に訓練する必要がある。

発見学習を指導していくには、指導すべき問題について、しっかりした基礎的な知識をもたせ、それに関連した経験を豊富に持たせることが必要である。また先生が直観を働かすことができ、その喜びを知っていることが大切である。

（東洋大学）

## 思　い　出　二　つ　三　つ

先生は文人としての面をかなり幅広くまた豊かにもっておられた。詩に、和歌に、俳句に、時には川柳さえも、それらはほとんど日常の幼稚園風景を筆太の字で。この字がまた近頃の何々派をとうの昔に超えて特徴があり、紙反古の裏などに何げなくぶつけたように書いて見せて下さった。これを拝見してあたかも先生の御性格を見るようで、そう思いながらその紙片を眺めたものである。

詩人であった先生は長詩なども作られた。私は詩はあまり興味がなかったが、イギリスの有名なウォーズワースの雨の詩だけはなんとなく好きであった。

雨はどこにもふっている

## 新　庄　よ　し　こ

うちにも木にもふっている

海の上にもふっている

わたしの傘にもふっている

ある日おはなしの時間にみんなによんできかせてから一しよにくちずさんでみた。身近な情景であり、ふっているふっているの繰り返しがいかに幼児むきで心に通じるものがあったのか、それから吟誦という言葉もあてはめてみてよく唱えたものである。先生が廊下のゆきずりにふと聞かれたらしく、これをとりに上げたことを喜んで下さったことで、私は大そう力を得たように嬉しかった。

音楽についてもそうであった。この鑑賞が幼児教育に大切



な一役で、これによって心を豊かにするようにと私たちを集めてレコードをかけ解説までして下さったものである。大正十一、二年ごろはまだ若かったが洋楽にはうかつた。幼稚園唱歌とか古来の邦楽に耳なれているものにはすぐにはとりつかれなかったが、先生の御熱心に、これはおろそかにはできないと心を勵ましてユーモレスク、スプリングソングなどきいているうちに、段々音に親しみがでて少しずつわかつてきたように思われた。ことにスプリングソングは幼児も喜んで聞き、静かに音楽を聞くという態度さえみえてきて、先生がわれわれ大人の指導をまずと考えられた意のありがたさに気がついたのであった。

先生が私たちに洋装をおすすめになった時があった。多分大震災のあと、やっと仮園舎に移ってからの大正十三年の夏ごろからか、にわか一同そろって洋装で幼稚園に通うようになった。今なら当り前で、和服を着ている方がおかしなわけであるが、その頃は分校内のここかしこで話題になったようである。及川先生のが今ありありと思ひ出される。スカートは鼠色で上衣は黒、花壇のそばに立たれた姿は、写真でイタリあたりに見る人のようであった。菊池先生は若い新卒なので不思議もなし、私はわざわざ麴町の何とかいう店にいい布があるというので買ってきて、その上帽子までかぶり、倉

橋先生が洋装の要は歩き方にあるとおっしゃった一言を忘れず歩いたものである。ある日裏門から入ろうとした時すれちがいに教育の下田次郎教授にバッタリお会いした。おじぎのときは何ともなくいつもの御様子であったが、このあと笑いを我慢さった口もとの何ともいぬ動きをチラとみてハッとしてしまった。颯爽の気もちがもろくもくずれて、またもとの姿で通うことにした。倉橋先生が何で洋装をおすすめになったのか、伺いそびれて残念に思っているが、多分御帰朝後あちらの婦人の軽装が幼児のあつかいにふさわしいこと、また大震災などの不時の災害には和服ではめだるくお感じになつてのことか。何事にも先見の明のお方故現在の一般化した姿をかの時ずでにおさとりになつてのことか、うまくゆけばとのお見込みが外れ、さぞやがっかりなされたことであろう。この話は今もって興を伴う語り草になつており、その度に冷汗をかく思いである。

さて先生のもう一つの面をあらわす一事件といえは大げさであるが忘れられないことがある。先生は情熱に燃えるのかのごとくに見える時も多いが、別の一面、例えば大川の水面はかすかな風にもそよぎを見せる風情でありながら底の流れは動きなくただ上流から下流へと滔々と冷然として流れて行く、それに似たお心構えであつたように思う。こんなこと

があつた。実習生室の掲示板に一片の紙が貼られ、それは東京女子高等師範学校という公用箋であつた。だれがこれを利用して使つたかといつに似ずきびしい語調で問われたが、すぐにはわからなかつた。それが何と私の組の学生であつたことがわかり、どうも先生はお心が解けなかつた様子、このまま

では相すまぬと私は夜になつてお宅に伺い、不行届をひたすらお詫びして歸つた。つまり公私の別は明らかにすべしとお心の厳しきまでに守られた一例であつた。以来形はいろいろに変われど、このお心持はありがたき誠めとなり、また先生の尊きを思うやすがになつて長く私の心の中に生きている。

かくて今は勁く誓ふんみ教へを  
守りゆくべし金うすべし

幼稚園の職につきたるまゝはひと  
この先達の師にあひること

桐の花紫こめて青空に

咲くを――みれど師の恩はる

必ずや新茶のときは師をかんみ  
語らひあひぬ菓子を忍らひて

# 叙勲の榮譽に浴して感激の中から

林 釵 子

「多年幼児の教育につくし、幼児教育の発展に寄与した」ということで、昭和四十年十一月三日（文化の日）に、勲五等瑞宝章を賜り、無上の榮譽に浴し、大きい感激に溢れています。私一人の榮譽でなく、幼児教育にたずさわるものの、榮譽であると、喜ばしく思っておりますとともに、より責任の重きを感じます。

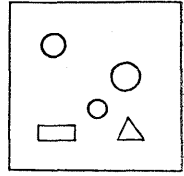
私は何のとりえもなく、ただこの道一筋に満五十一年間幼児教育の道を歩いてきているだけです。

大正三年四月から幼稚園に就職しました。その当時は二十三才の若さで、みんなの指導をうけて、素直につとめていま

したが、一年、二年とつとめているうちに、幼稚園の毎日はこちらでよいものかという不安な気持ちが動いてきました。と申しますのは、小学校の型を小さくしたような、時間割的な保育案によってなされたからです。

一例をあげれば、

曜日	午前	昼食	午後
月	積木 話し方	昼食	摺紙
火	貼紙 遊戲	同	唱歌
水	画き方 箸ならべ	同	豆細工



まるで、小学校の教科の取り扱いに似て、一斉保育でした。貼紙なども先生のお手本と同じように貼らせました。材料もそれに必要な色や形を一人ひとりに準備しておきました。貼る位置も右上図のように、○とか、□とか、△とか印をつけて、少しも違わないように貼らせるし、「ぬりえ」も先生の見本と同じような色でぬらせました。間違えれば注意されるし、中には劣等感をもって、その仕事がいやになる子どもも、できてきたありさまでした。

このほか「縫取り」「積木」など、どれもこれと同じような指導振りでした。

先生のたてた保育案をくり返し、子どもたちは先生のいうとおりに動かされていて、子ども自身の考えや活動は活発になされていません。ほんとうに活気がなかったと思います。

私は、幼児の世界に入って、このままでは、幼稚園の教師をつとめる勇気がないので、当時恩師倉橋惣三先生の御実家が静岡でしたから、先生が御帰静の際御相談しましたら、幼稚園の勉強をするために、お茶の水の女子高等師範学校保育

実習科へ入学したらと、おすすめ下さいましたので、英断をして、家庭を犠牲にし、手続きをとり、大正六年四月同校に入学しました。

旧姓池田先生、及川先生が受持ち教官で、御懇切な御指導をいただきました。六ヶ月間の研究に専念して、大正六年十月同校を修了しました。

これで漸く自信もつてきましたので、大いに新しい研究をと幼稚園教育への夢をふくらませて、新しい試みへと歩をすすめました。

第一年目は黙々として、保育実習科で学んだものから、従来の型破りへと、慎重に考慮を払いつつ、研究的に行きました。自分だけでなく園全体の先生にも理解してもらわなければならないので、これがまた容易なことではありませんでした。

相変らず、どちらをむいても、教師の計画した保育案通りに行なわれていました。僕の面についても、親や、先生が「ああしなさい」「こうしなさい」「いうことをきかないと、よい子になれない」などと消極的で封建的でした。けれども、近代では、経験生活の中で、自然に理解し、身につい

ていくように、指導されている点が大いにちがっています。

早くから倉橋惣三先生は、さかんに「こども尊重論」を叫ばれ、生活の中で子ども自身が学んで、身につけるように御指導下さいましたが、その御高説も、頑固な人びとの耳にはきこえないのか、依然として旧体制の型が多かったのです。

私のやり方が変わっていると、周囲からも、幼稚園の先生方からも、ひなんされたり、攻撃されたりしましたが、私は信念をまげずに、自由なる世界に幼児を生活させながら、終戦直前までまもりつづけてきました。

倉橋先生が私に、保育実習科を修了した時「馬車馬になって走れ」と仰せ下さいました。それは即ち周囲の雑音に耳を傾けないで、前を見て、真しぐらに進めとお悟し下さったのだと、それを金言として、信念を貫くためには、困難を克服して行く覚悟であります。

終戦後一切が灰となっていました。焼跡に放りだされた子どもの姿を見て、やむにやまれない心境から、復興を思いたち、バラック建の自分の家を開放して、青空幼稚園といわれながら、小規模な建物の中で保育をはじめました。保

育材料も求められないこの時、自然物や焼け残りの廃品を保育資料としましたが、実習科で学んだこと、研究したことが、大きく役立ち、これこそ真の生活教育がなされるのだと、嬉しく思いました。

希望は次々と盛り上ってきて、新しく園舎を建築するなら「かくありたし」と理想をかかげて、計画実現を祈って毎日を暮しましたけれども、何といっても、物資も、資力も乏しく、実現はむずかしかったのです。

全県下の幼稚園は、いうまでもなく、休園又は廃園となり、分散していましたが、昭和二十一年五月浅間神社に会合し、折しも暴風雨の悪天候にも八十余名の参加者があり、一同厳かに、神前にぬかづいて、私どもの強い信念による復興の誓をしました。

これまで幼稚園は小学校へ入学するまで家庭の手だすけになる預け場所のように考えられていましたし、一般社会も小学校入学前の大切な教育の場という理解認識もうすく、幼稚園の先生は、子守の上等程度に思われていたのが、小学校の先生の待遇に比較して、実にわるく遺憾に思っていました。

時に昭和二十二年四月一日新憲法公布とともに幼稚園は教

育基本法の中の学校教育法の中に位置を占め、新しい幼稚園が誕生し、学校教育法第七章、第七十七条に幼稚園の目的が明示され、第七十八条の五目標達成につとめることとなり、文部省から、幼稚園教育要領並びに各領域はいうまでもなく、他の重要な教育に關しての指導書も出版されておりますし、指導者講座も開催され適切な指導の途が開かれていますから、自然に昔のような型にはめられた姿はうすらいできました。

しかし設置規準への到達は、容易でなく、施設設備の充実、有資格者を求める点については、充分とはいえません。

新しい幼稚園の目的には「適切な環境を与えて」ということが、特にあげられているので、理想の教育を目指して園生活をさせるのには、よい環境をととのえて、よい方法のもとに、指導して行くことです。従つて、設置規準に到達するよう大いに努力しなければなりません。

しかし、いうは易く行なうのは難しの諺の如く、よい施設、設備を整備するには、先だつものは資金なので、なかなか実施できない現状です。実現するには大きな努力が必要です。決断を要します。

又以前には幼稚園の先生を保姆とよんでいましたが、現今では、小学校の先生と同様、教諭とよんでいますし、資格を取得するにも新しい規定があることも、皆様御存知のことと思います。

次の世界を動かす人間の土台づくりである、幼児の教育の使命と、責任は、実に重大です。その任務になつてゐる私たちの仕事の尊さを知る時、設置者も、現場にはたらく教師も、生命力に強く生きて、家庭との連絡を一層密にして、使命達成に全力をつくしたく思います。

昭和四十一年は幼稚園開設九十周年に相当する意義深い年なので、これを機会に更によい幼稚園環境をつくり、よい方法、研究された指導のもとに、幼児教育の効果をあげ、一般社会に、幼稚園にたいする理解認識を高め、幼稚園の発展に尽瘁することを誓いたく感激の中から幼稚園の今昔の一端を述べさせていただきます。

(桜花幼稚園)

# 学年末「たのしい会」のもち方



清水エミ子

「もうすぐ〇〇組(年長組)になるんだね。やんなっちゃうな、小さな組の子に世話やかされるね」

「さあたいへんだよ。いそがしくなる」

ついこの間まで年長組に世話をやかせていた年少児たちが、三学期も終るころになると、なまいきなことを友だちというようになります。そして、わたしたちもまげずにやるぞ、と意気こんでいるようですが、現われるようになってきます。

「一年生になると、こんどどこに遠足に行くのかな。学校の先生はきっとむずかしい問題をだすね」

「わかんなかったらやだなあー」

「うりやさんこっこやった時、ひろし君のうりやさん、おもしろかったね。大声をだしてさ」

「ねずみとねこやって、しげる君とよしえちゃんなかなか勝負がつかなかったのね」など年長児たちは、保育者のリードで楽しかった幼稚園(保育園)生活をなつかしく

ふりかえりながら、次に待ち受けている小学校生活に、不安と期待のいりまじった気持ちを持っているようです。

このように、三月の子どもたちの状態をみつめると、それぞれが、ふくぎつな期待で満たされているなかにも、何か落着かない、不安定な気持ちもあるようです。

このような状態の子どもたちと、学年のしめくりとしての活動を、どのように展開していったらよいのでしょうか。一年の、そして二年の集団生活のしめくりとして、すべての保育者は、楽しい活動をして、思い出にとどめたい、と考えるのではないのでしょうか。幼児たちが楽しい会だったと感じ喜ぶ会とはいったいどんな会なのでしょう。私は毎年、こんなことを、三学期も終りに近づく頃になると考えるのです。

私たち保育者は子どもたちにあたえる活動を概念的に考えてしまつて、子どもたちののぞまないものをあたえてしまひ苦しめてしまっているのではないのでしょうか。



よく行なわれる活動のひとつに「たのしい会」というのがあります。この活動で学年の終りをしめくくるのです。(ひなまつり会、遊び会、学芸会、お別れ会、進級会など)その表現の仕方はそれぞれことなるのですが、展開される内容は似かよっています。その大まかなちがいを考えてみると、

#### ねらいのちがい

◎ステージの上から大人や友だちに見せるためのショー的にまとまったものをする。

(お遊び会、ひなまつり会)

◎ステージの上でするが、友だちどうしでやったりみたりしてたのしむものをする。

(お別れ会、ひなまつり会)

◎子どもたちが主体だが、その中に母親もなかまいりできるものも含められるようなものをする。

◎ホールなどで自然の型でたのしい遊びをする。(年長児を送る会)

◎学級だけの学年のまとめの会をする。  
(ひなまつり誕生会、年少組さよなら会、

幼稚園さよなら会) などがあるようです。

このように「ねらい」や「型式」によって少しずつ内容にちがいがあることがわかります。私は、このどれひとつをとっても、いけないものはないと思いますし、それぞれに意図するものがあると思うのです。しかし、もう少し子どもの状態や活動のねらいを、ほりさげて考えてみると、これらの一連の活動の中で、ちがってはいかない、根本的なものがあるのではないかと反省させられるのです。それは、

この活動で、子どもたちに何を考えさせ、何をあたえ、何をさせるのかということなのです。

子どもの可能性のどの部分を、どのような型でひきだし、育てのばすかということだと思ふのです。

保育者がこのことをしっかりふまえて、子どもといっしょに計画し展開していかなければ、子どもたちには、ただ大変だった、むずかしかったなどの苦しみが残るだけ

になってしまふのではないでしょう。

◎計画にむりのないこと、やる方もみてる方も疲れたり苦痛を感じたりしないようにする。

◎大人からあたえる計画でなく、子どもたち自身が計画したものにする。

◎学級又は学年、園全体の対象の幼児全員が興味のある楽しいものであり、誰でも参加できるもので、程度の高すぎないものにする。

◎参加することによって自分の持ち味を発揮し、友だちの持ち味も知ることができるようにする。

◎会や活動のはじめから終りまで(その計画、流れ、展開、まとめ)をはっきりわかるよう(認識できるよう)ひとつひとつたしかめながら展開する。

これらのことを保育者は心して子どもたちの前に糸口をなげかけてみてはどうでしょう。

#### ①年少児に

◎新入園児を迎える会のために（一日入園のためなど）「もうすぐ皆さんは大きい組になりますね。小さいお友だちに幼稚園はみんなで遊んだり仕事をしたりするところとて、とってもたのしいのよって知らせてあげる会を考えてやってみましょう。そしてみせてあげて下さいな」と呼びかけたり

◎「年長組のお兄さんお姉さんともうすぐお別れだからお別れの会に何かしてみせてあげましょう」などと呼びかけてみます。

この時一年間に経験したことの大半が加わるように保育者はかげでみちびきます。

◎おまねきのお知らせをだす。プログラムやことばは保育者が印刷し、きれいな招待状を作ります。

◎どんなものをどのようにするか計画を立てる。この時保育者は、子どもたちの考えがつつみこめるような大きなわくをあたえてあげると考えやすくなるのではないでしようか。

お話も、リズム遊びも、げき遊びも、ゲ

ーム遊びなど大きくても小さくてもつなげていけるようなかたまりにしていけるように（ミュージカルのようなものに）子どもたちの作るストーリーの表現に変化をつけさせるようにしてみます。（動物村の幼稚園、春がきましたなど）一年間の思い出や、子どもたちの物語をそれぞれの特技でうめていくようにするのです。

◎人形げきで、入園当所のけんかの場面を楽器遊びで、えんそくや音楽会を

◎カミシバイで、創作童話やエピソードを

◎保育者とリズム遊びやげき遊びで、呼びかけを、といったように進めて行つてはどうでしょう。このひとつひとつの結びには、リーダーの幼児の解説や、ゲーム遊びなどを折りこんでいくと、おどろくほどスムーズに会が流れていくようです。（年少組年長組がいっしょになってする時には、分担をきめて行なえばよいようです）

## ②年長組に

◎小学生になるため、幼稚園お別れの会

◎こんないろいろなことができるようになりますと親や友だちに知らせ合う会に「もうすぐ小学生ですね。幼稚園でずい分いろいろなことをしたのしみしましたね。

みんな友だちと力を合わせていろいろなことができるようになりましたね。どんなことがでできるようになったか、たのしい会をしてみせっこしましょうよ。とくいなものをなかよしの友だちと計画して発表してみせて下さい」と呼び掛けます。少し時間をたっぷりかけて小グループでまとまったものができるように導きましょう。

◎大好きだったお話や紙芝居を、かげ絵にしてみる。

◎大きな紙に、創作の絵話を作って描く。

◎いちばん思い出にのこっていることを、等身大のペープサートにやってみる。

◎みんなで作ったうたをうたったり楽器でえんそうしてみたりする。

◎短い、ごっこ遊び（幼稚園ごっこや乗物ごっこ、買い物ごっこ）をリズムミカルに仕

組でリズムミカル表現遊びにする。(この時、母親や保育者も参加してもよい)

### ◎げき遊びをする。

これらの立案から準備、練習まで子どもたちにまかせてやらせてみる。保育者は材料や環境をととのえ、かげの応援者になるよう、ひとりひとりの進度をしつかり把握するようにしないと、脱落者がでてしまうので注意したいものです。練習をするさい、それぞれのグループでみせあい、友だちの意見をとり入れてなおしていきけるよう、助言していきます。

それぞれのグループがまとまってきた時、プログラム作りをします。この時、何の次に何をした方が、準備都合でよいのではないか、似ているものがくつついていないほうが、楽しいのではないかなどいろいろのことを気づかせながら、プログラムを作ります。

司会者や、お客さまの接待なども、だれがいつ何でどうしたらよいかなど、会

あげの相談をします。

### プログラム

はじめのことば

しかいしや

・園長先生のお話

・たのしいフォークダンス

・人形しばい

・ゆうぎ

・お母さんのうた

・かげ絵

・先生方のげき

・えばなし

・楽器あそび

・ごっこ遊び

・うたとゲーム

・ベープサート

・お母さんとみんな

しりとりのうたがっせん

・おわりのことば

・おれいのことば

○○組○○○○

○○○○

○○グループ

○○グループ

○○グループ

お母さん

○○グループ

せんせい方

○○グループ

○○グループ

○○グループ

○○グループ

○○グループ

みんな

○○組○○○○

年少組○○○○

以上のように紙面の都合で、具体例を示

して計画・展開を考えていくことができず、ざんねんなのですが、要は

「たのしい会」は字でかくだけのものではなく、口でいうだけのものではなく、子どもたちひとりひとりの心に残るたのしい会であって、はならないと思うのです。

◎大人の作りあげたものも、さるまねさせるのではなく

◎美しく着かざる(いしょう)ことにあくせくするのではなく

そばくな、たのしい会でありたいのです。

ふだんの園服に、手作りのオメンやかんむり、小道具、でたくさんです。そのひとつひとつに幼児ひとりひとりの心がかよい、汗がにじんでいけばよいのではないのでしょうか。そしてこの会が、それぞれの幼児のこれからの出発の土台石になるきっかけになって、前進していけば、この活動のねらいは充分に達成されたのではないでしょうか。

(足立区立関屋幼稚園)

## 私のこころみ

# 幼児の生活から取材したお話



鈴木 正子

幼児たちは自分の知っていることや経験したことに関係のあるお話をよるこびます。そこで私は幼児に与えるお話の中に、教師のつくった幼児の生活から取材したお話を時々加えてみることをこころみてみました。

みんなで楽しく遊んだことがらなどをもとにしてつくったお話は、おもいあたるふしが多いのでとくによろこび、自分たちの生活をよく知ってくれるということで教師への親しみも増し、幼児との心の交流に役立ったような気が致します。

又こうしてほしいとおもうようなことがらを、身近な例をとりあげてお話にして与えると、案外幼児の心に自然に伝わり、生活指導の面にプラスして嬉しくおもったこともありました。

次にあげたものはその中のいくつかで、専門的にみたらたいへん未熟なのですが、教師のお話づくりの意味といったものをくみとっていただけたら幸いです。

サルビア

四才児向

サルビアの花って赤いのね。

暑い暑い夏の花ね。ぼっぼ、ぼっぼ、お日さまの下でもえてるの。

小さなあかい袋がいくつも集まって咲いてるの。サルビア、サルビア、名前もおかしい花ね。

ある日小さな坊やがサルビアのはたけに行きました。黄色い蝶々が一匹サルビアにとまっていました。

「蝶々さん、なにしてるの」

坊やが蝶々さんに聞くと蝶々さんがいいました。

「みつをあつめてるの」「みつってなあに」

「あーら、みつを知らないの。みつは甘いのよ」

蝶々さんはそういつて長い細い口を赤い袋の中に入れました。

「この中にあるの。何だったら坊やもなめてみる？」

坊やが蝶々にいわれて小さなあかい袋に手をのばしました。

そして坊やは、

「ひとつだけちょうだいね」とサルビアにいつてとりました。そうして坊やはそっと赤い袋を口へもっていきました。

「どーお、甘いでしょ」と蝶々がいました。

「うん甘いね」と坊やは笑ってこっくりしました。ほんとうに、すこしだけ甘い味がしました。

「それだけね」と蝶々が坊やにいました。

「それにさ、毒のお花もあるから、今度お花がほしい時はママか先生に聞いてからね」といいました。

「うん、いいよ」

坊やはどう花をとりました。そして蝶々さんが蜜を集めるのをいつまでもいつまでもみていました。

夏休みあけのある日のことサルビアの花壇のまわりに赤い花びらがしきつめたように散っているのをみつけた私は、まもなくそのわけがわかり、おもわず苦笑してしまいました。

「この花はあまい」という、だれかの発言にしたがって、みんなが、我も我もとためしてみた結果だったのです。

咲いている花をやたらにつんではいけないことは百も承知だったわけなのですが、知りたい欲求はきまりを破るほどに大きかったようです。私は幼児の大きな発見もみとめてやり、又花を大切にすることも知らせようということで、こんなお話を思い

つきました。幼児たちは私のねがいとするとくろをくみとってくれたらしく、それからサルビアをやたらにとることをやめ、どうしてもほしい時は許しをもとめるようになりました。

### くるま君

五才児向

トンボのくるま君は窓の外からのぞきこんだ室が子どもでいっぱいなのをみておどろきました。

「毎日毎日だあれもいなかったのにどうしたんだろう」と、くるま君は、すーいすーいと高い回転窓から室の中にすべりこみました。

「あ、とんぼ」とひとりの子がみつめて指でさしました。

「あ、ほんとだ、ほんとだ」と、他の子たちもみつめて両方の手をあげました。

「くるまどんぼだよ」とその中のひとりがいいました。くるま君はびっくりしました。どうしてって、自分の名前をもう子どもたちが知っていたからです。

くるま君は茶色の紋のついているうすい羽と、だいたい色のしっぽをできるだけのばして机のいちばんすみっこにいた女の子の頭にとまりました。

「こんにちは」そういったつもりなのに、みんながわっと笑ってかけよってきました。くるま君はびっくりしてつーいと、とびました。そして柱にかかっているカレンダーさんの頭にとまりました。カレンダーの顔には25とかいてありました。

カレンダーが小さな声で「きょうからはじまったのよ。みんなまっくろくろな元氣な子たちですよ」と、おしえてくれました。

「あ、そうか」くるま君にはやっとこんなに子どもがいるわけがわかりました。

「チークチークチークチーク」十姉妹が箱の中でないていました。

くるま君は「こんにちは」と十姉妹の金あみにとまって声をかけました。十姉妹が、

「くるま君、もう秋だねえ、外には君のお友だちがいっぱいとんでいるだろうね」といいました。

「ああいるよ。ぎんやんま君やおにやんま君や、しおから君、ヒコキみたいにとんでいるよ。お日さまにキラキラ羽をひかせて」

と、くるま君は返事をしました。くるま君は、今度はおとなりの金魚鉢にいつとまりました。

金魚鉢には三匹の金魚がいました。たにしも一匹いました。

「こんにちは、ごきげんいかが」

くるま君の声で金魚はおよぐのをちょっとやめました。

赤と黒と、赤白まざった金魚との三びきです。

「おにわの池から、いまつれてこられたばかりなの。今度のうちもなかなかいいよ。ほら子どもたちが海からとってきてくれた白い貝がらも沈んでいるだろう。僕たちはあれで、かくれんぼをするんだよ」と金魚たちはじまんそうにいいました。それを聞いて、くるま君はちょっとうらやましくなりました。

「こんどは どこへ行ってみようかな」

くるま君は又考えました。そして部屋のもんなかで本をよんでいる坊やのところにいつてみました。

男の児はくるま君に気がつかないで本をよんでいました。そうつとのぞくとその本には、まんまるお月さまがいてありました。そして下の方に子どもをのせたロケットがとんでいました。

そしてしきりに男の子はなにかいっています。くるま君がそうつとその子のせなかにとまって聞くと「ぼくもお月さままでいってみたいな」といっていました。

くるま君が前にまわって、先のとがった、真中に窓のあるロケットの絵にとまると、男の児は、

「あ、くるまさんばだ。そうだ君がつれていってくれといいな」と、目をキラキラさせて大きな声でいいました。

くるま君はほんとうにヒコキのように大きくなりたいたいとおもいました。そうして月の世界に子どもをのせていけたらどんなにいいだろうとおもいました。くるま君はしばらくの間、大きな目玉でじーっとお月さまをみていました。

「くるま君、くるま君、はやくおいでよ」気がつくとお外でしおから君がよんでいました。

「もう帰らなければ、みなさん、さようなら又きますね」くるま君はいいました。

「又おいでね、仲良く遊ぼうね」子どもたちが手をふりました。く

るま君は羽をならしてすーいとびあがると、回転窓から秋の空の中に消えていきました。

八月二十五日は私たちの幼稚園の第二学期がはじまる日です。いままで静かだった幼稚園は幼児をむかえて急に活気にあふれます。幼稚園のもののすべてが、子どもたちのくるのをまっていたのですから。これは園のそんな雰囲気であらわしくつくったお話です。幼児たちがこれを聞いて又二学期もよろこんで登園してくれたらうれしいと思いながら、始業まもない日に読んで聞かせました。

## 笑いごま

### 五才児向

「こままわしするものこのゆびとまれ」

けんちゃんがひとさしゆびをたててスキップをしてまわると、じゅんちゃんとげんちゃんがとまりました。三人は暖かいお日さまがいっぱいあたっているゆうぎ室の日向をみつけてまあるくなりしました。三人は持ってきたこまを、いち、にっ、さんでだしました。

みんな同じ木のこまでした。白い太いなわのようにあんだひもでまわすこまでした。

「さあ、いち、にっ、さんだよ」

三人はきりきりと木のこまにひもをまきつけました。「じゅみょうながだよ」とじゅんちゃんがいいました。じゅみょうながという

のは、いつまでも長くまわしっこの競争です。三人はきつと口を結びと、いち、にっ、さんで投げました。

三つのこまはいっしょにくるくるとひもからはなれると、キーンとまわりはじめました。

動いているのか止まっているのかわからないくらい、こまは早くまわりました。

三人はじーっと自分のこまばかりみていました。息をしないでみていると、自分もまわっているような気がしてきました。

いつまでもいつまでも見ていると、胸がきゅーんとしてきました。三人は一緒にほーっと長い息をつきました。

するとこまがかたりとゆれました。こまはそれから「かった、かった、かった」と、音をたててゆれながらまわりはじめました。

三人は急におかしくなって、わっはっはっと笑いだしました。

「このこまは笑いごまだよね」とげんちゃんがいうと、みんな「そうだそうだ」といいました。

笑いごまはしばらく笑うと、三ついっしょにゆらゆらゆらりんところんどまりました。三人はそれを見て、「みんな、おあいこだね」ともう一度笑いました。

お正月になると子どもたちは、こままわしに熱中します。五才児ともなると私など及びもつかぬほど上手になります。それは幼児たちのこころがそっくりこまにのりうつてまわっている



るような感じですよ。

私はたのしく愉快なお話として、この話を与えてみました。子どもたちはただ意味もなく面白いお話も大好きなものです。

こおり

五才児

「みせて？」

「いや」

青いポケットのなかで

こんこんぶつかり合っているもの

「教えて？」

「いや」

まっかな手が

しっかりとおさえているもの

「みたいな、みたいな」

「こ、お、○」

何だか北風に消えちゃった

「聞こえないよ、もう一度」

「こおり」

「こおりだって」

「こおりだってさ」

(ゆっくりと二回くりかえす)  
これはあやちゃんのおはなしです。

あやちゃんは朝早く幼稚園にやってきました。そしてお庭の水道のくちから、きれいなきれいなつららがさがっているのを見つけました。きらきらお日さまに照らされて光っています。あやちゃんはそのうつつららを取りました。つらは二つにかけてカッチンコーンといってあやちゃんの手のにりました。

「これはあたしの宝物よ」といってあやちゃんは、それをそうとポケットにしまいました。

あやちゃんはそれからお友だちや先生の所へかけていきました。

みんな、あやちゃんのポケットの中で、何かがこんこん鳴っているのを聞いて、何がいっているのか、とても知りました。

あやちゃんは、はじめないしょにしておこうと思いましたが、とうとうみんなに教えてしまったのです。

きつと明日の朝はみんながこおりをみつけに早く幼稚園にやってくるでしょうね。

こおりは冬の子どもにとっては大切な大切な宝物です。子どもたちはよくポケットや引き出しにしまつて大事にします。

お話をきっかけに、こおりを対象にしたいろいろな遊びが生まれ、又こおりだけでなく、霜や雪などの冬の自然に眼をむけるようになってくれたらと思ひながらこんな話をしてみました。

(群馬大学文学部附属幼稚園)

## 動くおひなさまのアイデア

佐藤 諒

おひなさまといえば、普通は緋の毛氈を敷いたひな段の上に置き並べ、鑑賞されるものをいますが、ここでは、行儀よく、とりすまして座っているおひなさまではなく、子どもと一緒に動き、遊ぶおひなさまを考えてみることにします。

動くおひなさまといっても、むずかしい物理的な機構原理を使ったものではなく、幼い子どもにでもすぐ作れそうなものを述べることにします。したがって、前年度七号に掲載しました

『動くものを作るための基礎知識(一)』の発展と考えて下さい。

また、『動く』といっても、身体全体が動く場合も、頭とか手・足といった身体の一部が動く場合もあり、動くための原動力としては、空気の流動に従って動いたり、最初手でふれて動きを与え、その慣性としてしばらくの間動いているといった動きが考えられます。

1 つるしびな

ハガキのようなカードに糸を通してつりさげてみましょう。

カードは風の動きにつれて、糸を通した点を中心にして、右に左にくるくる回転したり、また、横からの風にひらひらします。これは、カードは平面ですから、横や斜からの風を受けて、回転しはじめるわけです。これが、一枚の平面でなく、折ったり、曲げたりして複雑な面をもつと、より一層風の動きに敏感に反応します。

図①のようにカードにかいたおひなさまを単独でつりさけても、図②のように二枚以上連続してつりさけてもよいでしょう。あまりひらひら動きすぎる時には、下にきれいなボタンやびんの蓋などをつりさけておもりとします。

また、カードにかくだけでなく、内裏さまや、官女などを切りぬき、それをつりさけても(図③)、色紙などを折りたたんで作ったおひなさまをつりさけても(図④)、よいでしょう。

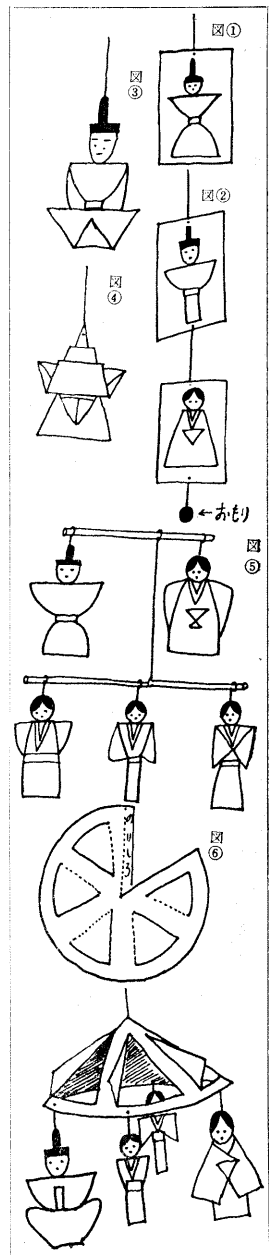
つるし方としては、前記のほかに、図⑤のように、モビール風につり上げると、一層活発に動きます。この際には、下の段から上の段へと、つり合いをとりながらつりさげるようにしていきます。

また、図⑥のように円形に切った紙で円錐形を作り、風受けの三角状の切りこみを入れて折り曲げたものに、つりさげてもよいでしょう。この場合は、円錐形の頂点を中心にして、くるくる全体が回転するようになります。このほか、単純でおもしろいつるし方をくふうしてみてください。

## 2 おきあがりびな

七転び八起きのだるまさんを御存知のことと思います。あのおきあがりこぼしは、底の部分におもりがついていて、寝ころがしても重心の関係で、すぐ起きあがるようになっていて、寝ころこの原理を使って、おきあがりびなを作ってみましょう。

図⑦のように、厚手の画用紙かマニラボールなどから、巾三



つ四センチのテープを切りとり、それで円形の輪を作ります。

輪の一端に小石か油ねんなどをくっつけ（セメダインやセロハンテープなどで）、おもりとします。輪を傾けたり、ころがしたりしますと、しまいにはいつもおもりが最下端となって静止します。この紙の輪の上部に、紙などで作ったおひなさまをとりつけます。この場合は、左右にゆらゆらゆれ動くことになります。なお、紙テープで輪を作ることが面倒であれば、円形の空缶（缶詰・化粧品などの）を利用すればよいでしょう。

動き方を前後にも、斜め方向にもしたい場合は、同じ大きさの輪を十字にしたり、またもっと数をふやすといった方法をとります。

更に、動きをスムーズにするには、球形のもの、例えばピンボンの球のようなものを半分に切り、その底の部分におもり（おはじきなど）をとりつけ、上部に紙をはりつけて、その上



す。

が大切です。この関係がうまくいかないと、ひっくりかえってしまったり、傾いてしまったりします。

5 首ふりびな

おひなさまの身体の一部（ここでは頭部）が左右に動くことを考えてみました。図12のように、煙草、キャメル、チョコレートなどの空箱の上部中央に、契形の切りこみを入れ、これを体としま

### 3 シーソーびな

円形の紙を図9のように折り曲げたり、紙テープを図10のように折り曲げたりして、半月形の形を作り、円弧の中央部下端におもりをとりつけます。その上に、紙で作ったおひなさまをならべて立てます。

手で左右どちらかに傾むけますと、ゆらゆらゆれて、おひなさまがシーソーをしている感じになります。

### 4 やじろべえびな

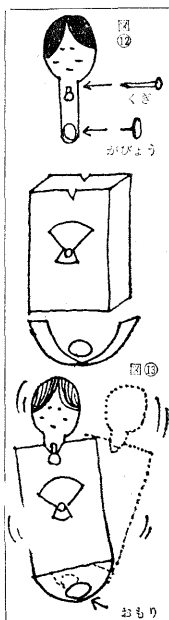
針金（二〇番線ぐらいのもの）を図11のように曲げ、切りぬいたおひなさまのうしろにはりつけます。（セロハンテープなど）この際注意することは、針金の左右の末端にとりつけたおもり（油ねんどやびんの蓋など）が、作用点④よりも低いこ

頭の部分は、空箱の中の引き出しの部分を使っても、他の画用紙を使ってもよいのですが、頭・首などを図のようにかき、切りぬきます。首の下端にはゼムクリップや画鋲などをくっつけておもりとします。のどの上部に短い釘などをつきとおします。

体の上部の契形の凹部に、つき通した釘の部分のをのせると、ちょうど首の下端のおもりが時計の振子のようになり、首が左右に動くようになります。

首の動きにつれて、手なども動くようにしてみてもよいでしょう。

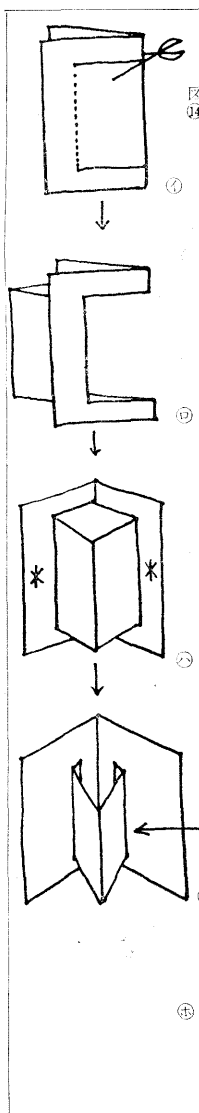
前記のシーソーびなの原理を併用すると（図13）、体と頭とが同時に動くことになり、動きが一層おもしろくなります。



## 6 折りたたみによって動くおひなさま

図⑭の④のように、二つに折りたたんだ紙の、折り目のある方から、上下実線の部分に切りこみを入れ、点線の部分を折り目として、⑤のように切りこみを入れた中の部分を、うしろにおりかえてみましょう。反対側からこれを見ると⑥のようになります。さて、この\*印のところを両手で持ち、紙を閉じたり、開いたりしてみましょう。おりかえしをした部分が、閉じる時には前方に出、開くと後方にしりぞきます。つまり、紙の折りたたみの動作と関連して、中央部が前後に動くこととなります。

このような動きをもとにして、③のように、二つ折りした紙の間に、その半分ぐらいの紙を二つに折り、のりしろの部分



(新宿区立  
津久土小学校)

にのりをつけてはさみこんでみましょう。紙を開閉すると、前記の場合と同様に、中にはさみこんだ部分が、前後に動くようになります。

中にはさみこむ紙に、あらかじめおひなさまをかくたり、また、⑤のように切りぬいたものをはさみこんでみましょう。

このようにすると、折りたためますので、封筒に入れ、郵送することが出来ます。余白の部分にお便りをかいたりして、お友だちと交換をし、親交を深めるのにも役だつことでしょう。

以上、簡単な原理を使って、‘動くおひなさま’を考えてみました。静的なおひなさまにもそれなりの意味があることでしようが、このように動くということを加味してみることも、楽しいことではないでしょうか。

まだ、子どもなりに変ったアイデアがあることと思います。皆さまた方の指導の成果を楽しみにしています。

# ちえおくれの幼児のための教材

西 山 恭 子

十月下旬に東京で、日本玩具国際見本市が開かれました。日頃、ちえの遅れた子どもたちに、どんな玩具を与えたらいいかと、デパートやおもちゃ屋さんを見て廻っても、なかなかこれぞと思う玩具にでくわさないので、大いに期待をもってでかけてみました。ところが、がっかりしてしまつたのです。

都立産業会館二階から五階まで、各階ぎっしり玩具が並んではいるのです。しかし、これこそ子どもたちに与えてみたいと思つた玩具がなかったのです。子どもたちというより、私自身がとびつたくなるようなものが、見当りませんでした。丁寧に一つ一つ見て廻れば、中にはうきうきするほど楽しくなる玩具があつたかもしれせん。しかし、目新しいもののどころか、その色と響きとにいささかくたびれましたし、時間が制約されていたことも加わつて、四・五階になると「ああ、また同じか」と数か所素通りしてしまいまし

た。イマジネーションの足りない、みみっちいものが騒然と並べてあつて、精巧を誇っているのはレーシングカーと、機関銃、ピストルなどでした。

つくづく思つたのです。日本の玩具というものは、子どもの立場にたつてつくられたものが非常に少ないと。玩具の生産量はアメリカに次いで世界第二位とのことです。量においては第二位であっても、質においては決して玩具王国とはいえないと思ひました。

最近ではメーカーの方々も玩具の重要性を認識して「おとなの興味で遊ばず、子どもの生活や遊びを中心に考えるべきです」。また「丈夫で安全なおもちゃを選びましょう」などと、本もだしていらつしやいます。しかしたいいていの玩具は、ちえ遅れの子どもたちに与えると、二・三日でこわれてしまいます。ですから、まず丈夫なことを玩具の第一条件にしている私どもは、会場で「これ丈夫かし

ら」と触って見たら、ビシッとひびの入ったプラスチックのままだとがあり、会場係の方と思わず苦笑した場面もありました。

玩具のメーカーに対する不満はこのくらいにして、愛育研究所、家庭指導グループでは、ガラガラからマットまで、大小含めて一年間に百数種類の玩具を与えましたが、その中からヒットした玩具をいくつか紹介したいと思います。

はじめに家庭指導グループについて簡単に説明いたしますと、このグループは、精神発達遅滞幼児のグループで、私どもは、この子どもたちに、集団治療教育を行なっております。治療教育ということに関しては、またいずれかの機会に譲ることにします。子どもたちの生活年齢は三才より七才五月まで、平均五才三月。発達年齢は一才四月より三才八月まで、平均二才二月で二才代が最も多く、一才代がこれに次ぎます。発達指数は二五より六七、平均四三で三〇台と四〇台が多くなっています。クラスは三才児だけ八名の週一日クラスと、四・五才児中心の週二日クラスがあり、こちらは一クラス定員十二名ですが、ちょっと多すぎるようです。一クラスについて主として二名の指導者が指導にあたり、あと一名が記録兼ヘルパーとして参加します。精神発達の遅滞した幼児は、だれでも申込み順に、欠員があり次第グループに入ることができますので、単純なちえ遅れだけでなく、明らかに脳外傷による子どもや、自閉症的疑いをもつ子どもなどが含まれています。

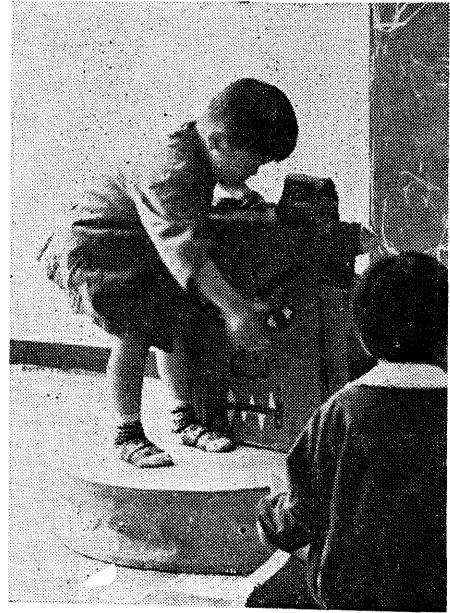
精神の発達が遅れている子どもでも、その諸能力はまだまだ発達の上上にあり、多くの可能性をはらんでいます。従ってこの子どもたちの発達に適した環境と刺激を与えることが必要であり、玩具のはたす役割も大きいわけです。子どもによっては歩行能力が弱く、ヨタヨタ歩いているものや、電車に乗れば、つり皮にぶら下がって、くるりと回転するという子どもまで、運動能力一つを取上げてみても、その差は大きい上に、子ども一人ひとり、その発達はアンバランスな面が多いので、玩具の選択に苦労します。私どもは、精神発達遅滞ということ抜きにして、生活年齢二才前後用の、ごくありふれた玩具をまず揃え、さらに身体活動に役立つ玩具、社会性を養うのに適した玩具、知的能力の開発に役立つ玩具などを考慮して与えております。その中でヒットした玩具を、今回は私たちの作製によるものと外国製品のものをご紹介します。

#### (一) 鬼あて(写真1)

ボール遊びは、運動能力を促進させるのに役立ちますが、グループの子どもたちは、ボールを投げてもそのボールが目の前に落ちてしまったり、力一杯投げられる子どもでも、あらぬ方角へ飛んでいてしまします。そこで、より一層ボール投げに興味を持たせたい、それには投げたくなるような目標をつくってはどうかと、遊園地の鬼の腹に玉をあてるゲームからヒントを得てつくったものを、鬼あてと名付けました。



(1)



縦、横、厚さ各々四十二センチ、三十五センチ、十二センチのダンボールの空箱を利用して、これを縦長に置いて、箱の二面に鬼の顔と、笑ったペコチャンのような顔を書き、その箱の中に鈴を入れました。これを適当な高さの台の上において、これも適当な距離から大きなボールを投げて、その鬼の面を倒すのです。ボールがあたって倒れると、中に鈴が入っていますので音がしますが、その倒れる瞬間が面白らしく、笑いの渦の中で次から次へと子どもたちが参加します。倒れるたびに起きねばなりませんので、市販されているビニールの大きな起上がり小法師（ロンバールームのジャックさん、おぼけのQ太郎など）の方が便利だと思われませんが、子どもた

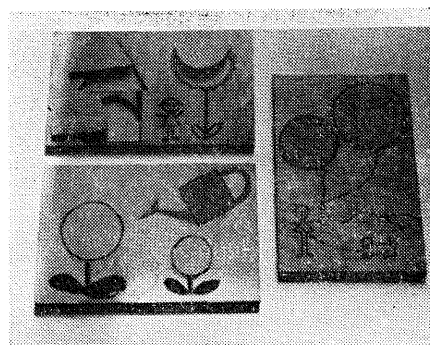
ちには鬼あての方が断然人気がありました。子どもによっては、鬼の顔よりペコチャンの顔の方にボールをあてたがる子どももいました。容易に倒したくてボールを投げずに近よってぶつける子どももいました。能力によって高さをかえたり、距離もだんだん遠くしたりしながら、笑い声とともに楽しく遊べる玩具の一つです。

## (二) 布ボール

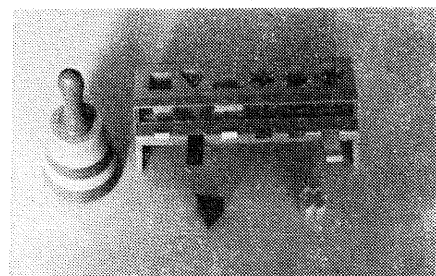
これは運動会で玉入れに使う赤玉・白玉と同じもので、中に綿をつめました。どこにでもあるものですが、これを部屋の中で玩具として与えたところ大変よく遊びましたので書添えました。主に子ども同志ぶつけ合いをしていますが、体にあたっても痛くないので、対人的活動の少ないちえ遅れの子どもたちには、この遊びによって対人関係もついていきますし、なんでもボールと投げることの好きな子どもには、それを禁止する前に、布ボールをかごに入れたまま与えたところ、積み木やままごと道具を放りなげることがほとんどなくなりました。

## (三) はめ絵（写真2）

市販されている玩具は、感覚的なもの、生活的な遊びに必要なもの、運動を楽しむもの、動くおもちゃといったものが多く、知的能力の開発に役立つようなものはほとんど見あたりませんので、そういったものを私たちが作製してみました。厚手のボール紙によるピクチャーパズルがありますが、市販されているものは、このグルー



(2)



(3)

ブの子どもたちには複雑すぎますので、もっと単純な形にすると、少々投げても叩いてもこわれない材料ということから、ベニヤ板(二〇センチ×三〇センチ)を二枚貼りつけて、はめ絵をつくりました。簡単な型、色、大きさ、方向の認識、構成等を目的としたものを七枚ほどつくりましたが、これがなかなか好評でした。

計画的に一回でバツとはめ込んでしまう子どもから、なかなかできない子どもまでさまざまですが、やってみてきちんとはまったときには、満足してにこっと笑ってみせます。この成功感というのは、ちえ遅れの子どもたちにも、かなり精神的満足を与えるように思われました。

#### (四) プレー・シェイプ——イギリス製——(写真3右側)

これはプラスチック製品です。全体の色が薄いグレーで、三角・四角など六つの窪みに同じ型をはめ込むもので、形の認識の目的をもった、教具という方が適しているような玩具です。子どもたちはバツと飛びつきました。前述のはめ絵の立体化でもあります。平面的なものより立体的なものは、一步高度ではありますが、穴にぴったり入れたりすることの好きな子どもたちには、その興味を満足させてくれますし、楽しみながら形の認識ができていくわけです。はめ込む方の型とそれを支える板とが同色になっていきますので、形の認識のできない子どもは色別によつてはめ込むことになります。グループの子どもにプレー・シェイプを二つ買って型と色とをバラバラにして与えたところ、一つのプレー・シェイプでは形の認識ができていたと思った子どもが、色によつてはめ込んでいる例がかなりありました。大きさも手頃で、手先の運動機能の劣っている子どもには、その感覚訓練にもなり、手に麻痺のある子どもが、気に入って、一心にやっています。

(西武、伊勢丹デパート五五〇円)

#### (五) リング・ベル——イギリス製——(写真3左側)

これもプラスチックでできており、分解のできるベルです。取手はねじ式で取りはずしができます。鈴の入っている底は緑色で、これに芯棒がついており、他にまるいプラスチックが四つ、大きい順に黄色、赤、青、ピンクとあります。この四つのまるいプラスチック

クを芯棒にとおして、取手をつければ元のベルができ上ります。

順番を間違えると形が不揃いでベルの形になりません。色の名前を覚えたり、大きさの違いが自然に分るというしくみです。プラスチックの色が、日本のものより不思議にきれいですし、少々投げてもしこわれません。がっちりしております。音がすること、分解できること、取手をまわすこと等、音を楽しんだり、手先の感覚訓練が、色の認識や形の認識に結びつくといった、一つの単純な形の玩具が、いくつかの機能を含んでいる、なかなか行き届いた玩具です。子どもの中には大きななどお構いなしで、ただ懸命に芯棒にとおすことに熱中する子どももいますし、ねじ式の取手のとりはずしに苦心する子どもなど、機能が多ければ、またそれだけ、子どもの遊び方もさまざまです。

(西武デパート五〇〇円)

#### (イ) ビジイ・ボックス——アメリカ製——

ベットの横に取りつけて音を楽しみ、絵を楽しみながら、それが手先の運動になるというものです。猫の鼻のつまみを押せばキューキュー音がしたり、ボタンをまわすと次から次へいろいろな絵がでてきたり、戸をあけると鏡になっていたり、汽車を引っばるとギー音がしたり、下に引っばるとはね返ったりするものなど、一つの台についています。普通の子どもの九ヵ月から四才用となっていますので、ちょうど発達年令が二才頃の子どもたちには適しているようです。他の玩具にはほとんど興味を示さないのに、このビジ

イ・ボックスにへばりついている子どももいます。一つのビジイ・ボックスに二・三人の子どもが集まっても、押したり引っばったり廻したりなど、いくつもの触れるものがありますので喧嘩になりません。

(伊勢丹デパート二〇〇〜二六〇円)

イギリス製にしてもアメリカ製にしても、第一に丈夫なのです。プラスチック製のものは、日本製のベラベラなものではなく、厚いものを使用しています。さらに色の調和がよく、原色を使ってもどぎつさを感じさせません。その上、使用する子どもの立場にたって造られていると思います。

一般に才能のすぐれた子どもの場合には、短かくて四・五日、長ければ一ヶ月前後一つのおもちゃを持ち続けるとみてよいそうですが、精神発達の遅滞した幼児も、一つのおもちゃと四・五日間でも充分に遊んでくれることを願いながら、あまりにきゃしゃな玩具が多くて、充分に使いきらないうちにこわれてしまうのをみています。それが一方ではここにあげたような、子どもが飛びつく上に丈夫でもある外国製の玩具を見ると、われわれの手で、自信をもって子どもたちに与えられる玩具をつくりたいと思うのです。

それには消費者もメーカー側に進んで協力すべきだと思いますし、目下ブームといわれているデザイン関係において、玩具は一步遅れている感じですから、玩具専門の優れたデザイナーが今後どうし出現してほしいと願っています。

(愛育研究所)

## 幼児後期の運動能力について (1)

— 4 ～ 6 歳 —



岡 本 卓 夫

### 一、幼児後期の子ども

幼児後期の子どもとは、いわゆる幼稚園時代の子どものことであつて、彼らは、今までの安定した家庭生活からはなれて、幼稚園という大きな社会集団の中にはいつていく時代である。

したがつて、彼らの生活領域も、今まで以上に拡大され、遊び友だちもふえ、遊びそのものもきわめて活発化し、走つたり、とんだり、はねたり、あるいはぶらさがつたりなどする全身的・運動的活発な遊びが、その生活の大部分を占めるようになる。

このような結果、この期は、幼児前期と比べて、飛躍的に運動能力が発達する時であつて、稚拙ではあるが、一応、各種スポーツの基本的なものができあがる時期でもある。

では、この期の子どもは、どの程度の運動能力をもっているだろうか。

この問題については、幼児前期の子どもの場合と異なり、彼らの場合は、被験児も得やすく、測定も比較的容易であるので、今までも、かなり多くの資料や文献がでている。したがつて、それらの中の主なものを参考にしながら、筆者の実験や観察あるいは測定をも含めて、この問題を述べていくことにしよう。

### 二、幼児後期の子どもの運動能力

第1図 保育所グラウンド（変化のない場所）



筆者らは、三才児四名、四才児八名、五才児五名について、変化のない場所としては、第一図に示すような県立保育専門学院附属保育所のグラウンドを指導者がついて歩かせ、変化のある場所としては、第二図に示す

幼児の運動能力をどうとらえていくか、という問題については、本誌第六四巻第一号五五頁、児童発達講座②「幼児前期の運動能力について（筆者）」においてのべてあるので、その考え方に従って述べていくことにする。

（一） 歩く

「体力づくり国民会議」がもたれ、わが国各地では、「歩け歩け運動」が実施されるなど、今日、ようやく国民の体力づくりの問題がクローズ・アップされてきたことは、誠によろこばしいことである。

ところで、幼児たちはどれくらいの距離を歩くことができるのであろうか。この問題は、幼稚園にとっては、同時に、園外保育時の歩行距離や所要時間をどの程度におさえるかという問題にも関連をもってくるものであって、教師としても見逃すことのできない問題であろう。

第1表 幼児の歩行距離・時間・疲労度

年令	場所	距離	時間	分速	1時間後の疲労	平常時の疲労
3	園内	750	14	54	6.9	6.3
	園外	1,740	34	51	6.6	
4	園内	1,090	20	55	6.9	6.6
	園外	1,800	35	51	7.2	
5	園内	1,600	24	67	7.3	6.9
	園外	2,250	39	58	7.2	

注 ① 3才児は、一応幼児前期の子どもであるが、一緒に実験した。② 実験の結果、1時間後の疲労度が大きかったため、それを上げた。

スなら、変化のないコースの〇・四・二・〇倍歩くことができるということ、また、それによって誘発された疲労でも、実は、翌朝には、すっかり平常にもどっているというようなことをも確かめることができた。これらの結

第2図 保育所周辺の道路（変化のある所）



ような保育所周辺の道路を歩かせ、幼児が疲れを感じ歩行を中止した時の距離と時間と疲労度（東洋PH試

第2表 幼児の  
25m走(秒)

年齢	性	タイム	平均
4	男	7.79 (7.6)	8.01 (7.75)
	女	8.27 (7.9)	
5	男	6.59 (6.6)	6.88 (6.75)
	女	7.20 (6.9)	
6	男	6.21	6.41
	女	6.85	

註( )内は重田  
為司の調査結果

第3表 幼児の持久走  
(20分間の測定)

年齢	走回	走った 回数	走った 距離 m	走った 時間	走った 時間 分	走った 時間 秒
4	8	455 (57)	6'40'' (50'')	13'26'' (1'40'')		
5	8.6	822 (95.5)	10'40'' (1'40'')	8'20'' (58'')		
6	7.8	934 (119.5)	9'30'' (1'13'')	10'30'' (1'21'')		

註( )内は、1回の走行につ  
いての記録

果から、彼らの歩行距離や時間の  
およその見当をつけることができ  
るであろう。

### (二) 走る

この期の子どもでは、まだ、タ  
イナミックな走り方は見られない  
が、それでも、相当しっかりした  
走り方になり、転ぶというような

ことはまずない。第二表は、児童母性研究会と重田為司の調査した  
二五メートル走のタイムである。

この表でわかるように、五、六才になると、スピードがぐっと上  
昇してくることがわらう。また、第三表は、筆者の実験結果であ  
って、四、五、六才と年齢別各五名に、五〇メートルのトラック  
を、二〇分間に、休みながらも走れるだけ走らせ、その間の距離  
と時間を調べたもので、いわば、彼らが、どれくらい持久走ができ  
るかをみたものである。

この表でわかるように、四才児は、走行距離も短く、時間も少な

第4表 幼児の立巾とび

年齢	性	身長 cm	跳躍距 離 cm	平均跳躍距 離 cm
4	男	102.9	89.2 (93.2)	86.9 (86.9)
	女	101.8	84.2 (80.5)	
5	男	108.1	105.1 (108.1)	101.6 (102.6)
	女	107.0	97.9 (97.1)	
6	男	112.6	115.7	110.7
	女	111.6	105.6	

註①( )内は重田為司の調査結果  
②身長は、昭和38年度、学校保  
健統計調査部の資料による

この期になると、立巾とびの要領もうまくなり、腕の振り、着地  
時のひざの屈伸などもおとなのそれらに近づいたフォームになつて  
くる。第四表は、児童母性研究会と重田為司の調査した結果であ

く、休けが多いが、五、六才になると、四才児の約二倍走り、走  
った時間も長くなり、前記スピードとともに、この時期に彼らなり  
に持久力も相当ついてくるものと思われる。一般に、われわれは、  
歩行の場合と同様、幼児はあまり走らない、きつい運動をやらせて  
はいけないと考えがちであったが、ここに示すように、伴走者がつ  
いて、声援を送ってやると、かなりの距離と時間走り回ることがで  
きるといことが理解される。今日、幼児の体育的指導を見た場  
合、必ずしも、彼らの欲求を満足させるだけの運動量がとれている  
とはいいがたいように思われる。したがって、これらの結果は、今  
後の指導の目安となるであろう。

### (三) とぶ

#### 1 立巾とび

# 第5表 3回とび

年令	距離	m
4		2.00
5		2.81
6		3.10

る。この表でわかるように、四才児では、男・女児共、まだ自分の身長だけとはべないが、五、六才児になると、男児では、大体自分の身長くらいとはべるようになるものである。

## 2 三回とび

# 第6表 幼児の走り高とび

年令	性別	身長	高さ
4	男	102.9	40
	女	101.8	
5	男	108.1	48
	女	107.0	
6	男	112.6	52
	女	111.6	

身長は昭和38年度、  
学校保健統計調査部の  
資料

では、三回連続（右左—左右—右左）してとぶとどれくらい跳べるであろうか。第五表は、筆者が、四才児六名、五才児八名、

六才児一〇名について、各人二回ずつ跳ばせ、よい方の成績を平均して示したものである。彼らは跳躍していくというようなものではなく、足をひきずるようにまたいでいくという感じであるが、この結果でも、前記の場合と同様、四才児と五、六才児との差はやはり相当あるようである。

## 3 走り高とび

次に、高さにおいてはどれくらいとべるものであろうか。実験者二名が、ゴム紐を張って二〇センチの高さから順次五センチずつ高くしていき、（場合によっては二センチの上下をした）同被験児について調べたものが第六表である。

これらの年令では、助走—空中フォーム—着地といったものは全く幼稚で、おせじにもおとなの場合のそれと似ているとはいえない。しかし、この結果からだと、この期の子どもは、自分の身長の

2/3くらいの高さまでならとべるのではないかと思われる。ここでも、また、四才と五、六才児との差がでていることに注意。

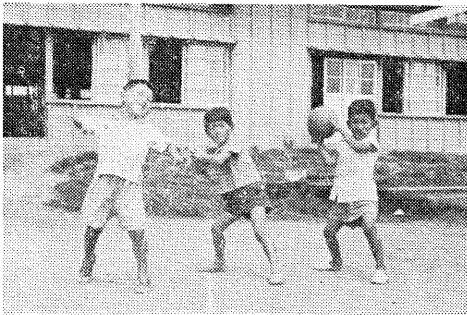
## 4 とび下り

幼児は一般にとび下りることを好む。この期になると、ほとんどの子どもが、自分の身長くらいの高さのところからなら、平気でもとび下りられるようになる。元氣な子どもは、もっと高いところからでもとび下りられるようになるものである。もちろん、着地もうまくコンントロールしてできる。五、六才児になると、五〇〜六〇センチメートルの高さのところからなら、片足ずつ前後してとび下り、そのまま駆けだしていけるようになる。

## (四) 投げる

### 1 投球フォーム

第3図 大きなボールでの投球フォーム（6才児）



大きなボールのオーバー・スローなら、この期の子どものほとんどが第三図に示すように、両手をつかみ、肩の上から投げえる。また、この時の足の構えは、四才児では、まだ両足を揃えていたり、前後の開きが少なかったりしてぎこちないが、六才にもなると、第三図に示す子どものように、じょうずに構え



られるようになる。

また、小さなボールでも、四才児は大きなボールの場合と同様に構え、肩の上から、ちよこんと投げる子どもが多い。しかし、五、六才にもなると、足の構え、ボールを持った方の腕の引き、重心のおとし方などもじょうずになり、はずみをつけて投げ、ボールを手から離す時のタイミングもよくなり、投球方向もやや一定してくる。一般に、女児のフォームは稚拙であるが、男児のフォームは、六才児にもなると、かなりいいフォームになる。

## 2 投力

第7表  
幼児の投力

年令	性	投力	平均
4	男	4.83 (7.00)	4.23 (5.65)
	女	3.39 (4.30)	
5	男	7.21 (10.2)	5.84 (7.85)
	女	4.40 (5.50)	
6	男	9.66	7.25
	女	5.50	

注 ①( )内は重田博士の結果  
②( )内は調査の結果  
③( )内は母性研究用  
④( )内は150グラムのボール使用  
⑤( )内は硬式使用  
⑥( )内は司会者のため

では、彼らは、どれくらいの投力をもっているものであろうか。  
第七表は、児童母性研究会と重田為司の調査した結果である。

この表で目立つことは、いづれの年令においても、女児より男児の方が投球能力が高いということであり、男児では、この期に、きわめて顕著な発達をするということがわかる。特に、五、六才になると、女児の二倍近くも投げるようになる。この傾向は、筆者の年長児に対する実験結果とも全く一致するもので、かかる運動を中心とする遊びの指導に当っては、この点を十分考慮してかからねばな

第8表  
幼児の正確投げ

年令	性	投球回数	得点
4	男	4.4	5.9
	女	4.5	3.1
5	男	4.7	10.1
	女	4.4	5.3
6	男	5.7	12.6
	女	5.1	5.7

五、六才児男・女各一五名を対象に、三メートルの距離から、直径二〇、四〇、六〇、八〇、一〇〇センチの同心円をえがいた壁的に向かって、一五〇グラムの軟式トップボール(一〇個用意)を一〇秒間投げさせ、その間に、何回投げて何点とるかを調べたものが第八表である。

この表でもわかるように、投げた回数においては、年令差、男・女差というものはあまり目立たないが、得点においては、それらの差が明らかにでている。特に、四才と五、六才男児における差とか、五、六才児での男・女差というものは顕著で、ここにも、投力と同じような傾向がでている。これらの結果は、今後、この種の遊びの指導に対して、重要な示唆を与え

らない。

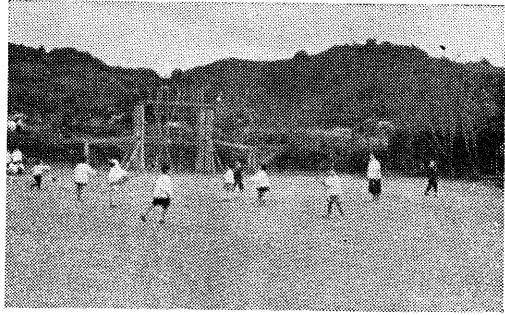
## 3 投球の正確さ

投球の正確さについての研究は比較的少ないが、拙著の実験要領<sup>(3)</sup>に従って、市立内町幼稚園児四、

第4図 幼児の捕球フォーム(大きなボール)



第5図 幼児の捕球フォーム（小さなボール）



ているように思う。

(五) 捕える

1 捕球フォーム

この期の子どもの捕球フォームは、いずれの年齢においてもどこもなく、例えば、第四図に示す如く、大きなボールの捕球では、両腕を前方に開いてつきだすように構え、小さなボールに対する捕球では、第五図に見られるように、手首を合わせ、指先を開き、前方につきだすようにして構える。

2 捕球能力

四才児の場合、大きなボールを、二、三メートルくらいのところから下手の両手投げでゆるい山ボールを投げてやると、ほとんどの子どもがこれを捕球することができるようになる。しかし、四、五メートルのところからになると、必ずしもうまく捕球できるとは限らず、捕球のタイミングが悪くなつて、ボールが手や腕に当たつてから抱えこもうとするような子どももでてくるし、少しでも投球の方向や距離がずれると、それに対する動きも悪く、ボールが落下してから捕球にかかる子どもがほとんどである。

第10表

捕球の回数別パーセンテージ（小さなボール）

年齢	性	測定人	回数			
			0	1～3	4～6	7～10
4	男	29	62.0	27.7	3.4	6.9
	女	30	63.3	33.4	3.3	0
5	男	74	40.5	39.2	14.9	5.4
	女	74	53.4	32.9	8.2	5.5
6	男	42	11.9	28.6	40.5	19.0
	女	27	37.0	40.8	18.5	3.7

第9表  
幼児の捕球能力

年齢	性	回数
4	男	0.7
	女	0.3
5	男	6.8
	女	4.8
6	男	8.6
	女	6.1

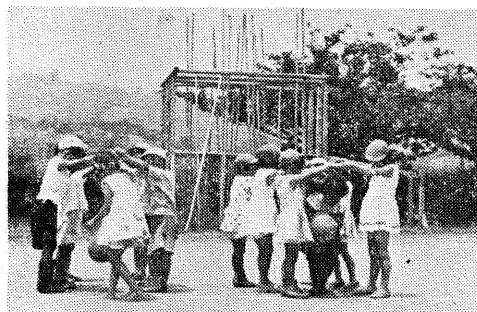
方向や距離の変化に対しては、まだ十分適応することはできない。

第九表は、市立内町幼稚園児、四、五、六才児男・女各一五名に、七インチのビーチ・ボールを使用し、筆者の年長児実験要領に従つて、一メートルの距離から、高さ一メートル、直径一メートルの壁にかいた円内に向かつて、両手の下手投げでボールをぶつけさせ、はねかえつてくるボールを、三〇秒間に何回捕球できるかを調べたものである。この結果にもでているように、四才児では、ほとんど捕球することができないが、五、六才児になると、平均五回～七回くらいは捕球できるようになるといことがわかる。

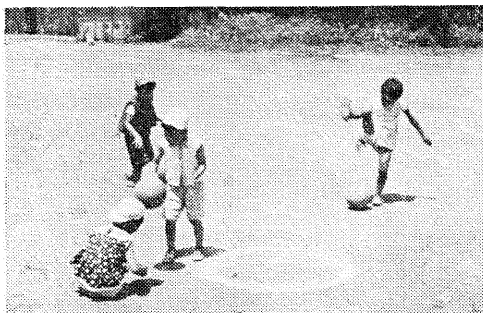
また、小さなボールの捕球になると、その技術もきわめて困難になってくる。教育大学体育心理研究室による調査では、第一〇表に示すような結果がでている。この方法は被験児と測定者の距離を三メートルとし、その中央に高さ一・三五メートル、直径三〇センチ

ところが、六才児にもなると、この距離からでも、同要領で投げやったら、大体、落下前に捕球できるようになる。しかし投球の

第6図 幼児の手まりつき(1)



第7図 幼児の手まりつき(2)



の輪をつくり、市販のゴムまりを、測定者が、その中を通して向こう側に立っている子どもに一〇回投げ、何回捕球できたかを調べたものである。この表でわかるように、一定した投球方法で実施しても、四才児では、六〇パーセントのものが全く捕球できず、六才児においても、なおかつ六〇パーセントの子どもが三回〜六回という程度の成功率で、この種の小さなボールでの捕球は、この期の子どもに相当困難な技術であるといえよう。したがって、小さなボールでの捕球遊びを、彼らに与えるということは、一考を要する問題といわねばならない。

(六) つく

第11表  
幼児の手まりつき

年齢	性別	回数
4	男	9.7
	女	13.3
5	男	15.5
	女	16.3
6	男	18.1
	女	18.7

る。これらの傾向は、筆者が、一年保育児を対象に、隔月で一か年間実験して得た結果<sup>(3)</sup>や教育大学心理学研究室で調査した結果<sup>(1)</sup>とも

ボールをつくという遊びは、投捕球あそびと同様に、彼らの生活の中に比較的多くとり入れられており、四才児でも、女児の場合では、かなりじょうずにつけるようになっていいる。しかし、この年齢では、まだボールのはずみにリードされているといった感じが強い。ところが、五、六才児になると、このような感じもなくなり、からだ全体で調子をとるようにして、かなり長く続けてつくことができるようになるし、第六図に示す如く、つきながら狭いところをくぐったり、ゆっくりではあるが、つきながら走るといったこともできるようになる。特に女児は得意で、第七図に示すように、片足を上げ、その下をくぐらせてつくものもいる。しかし、これらの年齢でも、小さなはずみから大きなはずみにしていくことや、手元を見ないでつくというようなことは、まだほとんどの子どもができない。第一一表は、市立内町幼稚園児四、五、六才児男・女各一五名を対象に、七インチのビーチ・ボールを使用し、筆者実験要領<sup>(3)</sup>に従い、直径二メートルの円内で、一〇秒間に何回つくかを調べたものである。この表で明らかのように、どの年齢でも、男児より女児の方がうまいということがいえる。しかし、男児の場合でも、四才児を除き、五、六才児になると、相当女児に接近してくることがわかる。これらの傾向は、筆者が、一

一致している。

### (七) 蹴る

「ボールを足で扱う」という技術は、現在、わが国におけるこの種スポーツの普及程度から考えて、われわれ日本人には相当困難な技術のひとつにあげられている。では、ボールを「前方に蹴る」ということだけをとりだして考えてみた場合、幼児としては、一体、どの程度の技能をもっているものであろうか。

大きなボールを、正面からゆっくり転がしてやるなら、四才児でも、これを蹴ることができる。しかし、蹴っても、どちらへ飛ぶかはわからないし、ちょっとでも方向が変わったりすると、ほとんどの場合、うまく蹴りかえすことはできない。ところが、六才くらいになると、少しくらいはずれていても、動いていき、これを蹴ることができるようになる。しかし、やはり方向はまだどちらへ飛ぶかわからないといった程度の技能でしかない。もし、正面でうまくとらえた場合なら、この年令でも一二、三メートルは蹴りかえすことができるようになる。しかし、正面から転がってきて、スピードのあるボールとか、はずんできたボールなどに対しては、ほとんど蹴りかえすことはできない。

したがって、この期の子どもは、先ず、ブレース・キック（ボールを静止させておいてける）なら、何とか蹴れるという程度の技能と考えてもよからう。この程度なら、四才児でも、フォームはきこえないが、かなり正確に蹴られるようになるし、五、六才にもなる

第8図 幼児のキックのフォーム



第12表

幼児のキック

年令	性	得点
4	男	7.9
	女	4.7
5	男	8.1
	女	7.9
6	男	8.9
	女	8.9

き、この期になると、かなり正確に蹴れるようになることがわかる。しかし、キックしたボールのスピードはまだない。

### (八) 打つ

「打つ」という技術も、「蹴る」という技術と同様に、ボール遊びの中では、困難な技術のひとつといえよう。例えば、子ども用バットで、小さなボールを打たせると、二、三メートルのところから投

と、第八図に示すように、からだのバランスをじょうずにとつて蹴るし、正確さも発達していく。第一二表は、市立内町幼稚園児四、五、六才児男・女各一五名を対象に、七インチのビーチ・ボールを使用し、筆者実験要領にしたがい、五メートルの距離から、ブレース・キックで、壁の中央一メートル巾五点、その両外側五〇センチ巾三点、さらにその両外側五〇センチ巾一点とした的に向って三回蹴らせて得た得点の合計を示したものである。この表から、ブレース・キックでなら、四才女児を除

第13表

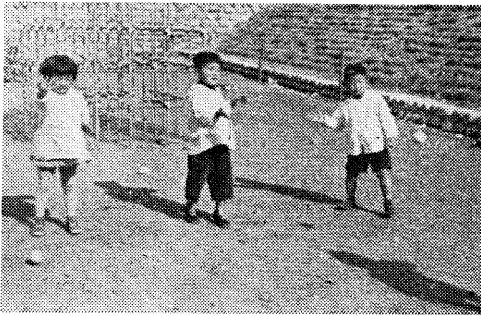
打球の平均得点

年令	性別	被験児	得点
4	男	29	2.5
	女	30	2.3
5	男	74	3.6
	女	74	3.2
6	男	42	4.5
	女	27	4.1

したがって、普通、この期の子どもが打てるボールは、平手とか、ピンボンのバット、バドミントンのラケットなど、手軽で平なもので、しかも、自分が片方の手に持っているボールとか、二、三メートルのところから、うまくコントロールして投げてやったボールくらいなら打てると考えてよいであろう。しかし、この場合でも、方向は全く決まらず、どちらへ向いて飛ぶかはわからない。

第一三表は、教育大学体育心理研究室において調査した打球の平均得点である。(1)この実験方法は、硬式テニスボールを、長さ二・五メートルの紐で、床から八〇センチメートルのところまでつるし、その直下から、半径二メートルの弧をかき、その線上までつるしたボールを引きよせ、静かにはなし、振れてき

第9図 幼児の打球フォーム（平手打ち）



げてやっても、この期の子どもでは、ほとんどから振りに終ってしまうものであって、これに当るようには、何十回、何日かの練習を要するものとみてよい。

たボールを、少年用バット（長さ七三センチ、重さ四二〇〜四四〇グラム）で打ち、一〇回中何回当たったかを調べたものである。この表でわかるように、ボールを一定の高さで、一定のスピードで動くようにしかけた場合でさえ、六才児で、なおかつ四割程度しか打てないということを考えてみると、打つという技術は、はじめにも述べたように、相当困難な技術であるということができよう。

#### (九) 転がす

「転がす」という技術は、一、二才の子どもでもでき、ボール遊びの中では、きわめてやさしい技術であるといえる。したがって、四才にもなると、誰でも自由に転がすことができ、自分がねらった静止状態の目標にも、三、四メートルのところからなら、大体正確に当てることができるようになる。五、六才児にもなると、少しぐらいの動いている相手に対してでも当てることができるようになる。(固定運動道具その他についての運動能力は次回にする)

(徳島大学)

#### 参考文献

- (1) 教師養成研究編 幼児の健康指導と体育 昭和三十一年学芸図書出版
- (2) 重田為司田中敏隆共著 幼児の体育あそび 昭和三十七年ひかりのくに昭和出版
- (3) 小田信夫岡本卓夫共著 幼児のボール遊び 昭和三十三年日本文化科学社

# 五才児の記録

③



磯部景子  
堀合文子  
津守真

時計づくりがはじまるまで

先生は一学期のうちに何かひとつ大きなまとまったことをしたいと考えている。木工道具を準備して、木工をするのもいいし、おみせやのつづきとして、時計をつくって時計屋にするのもいいなどと考えている。こうしたある日、子どもたちの方から「時計」がで

きたのでこれを取りあげることにする。

六月九日 火曜日

石あつめ、時計をつくりはじめる。

石に絵をかく

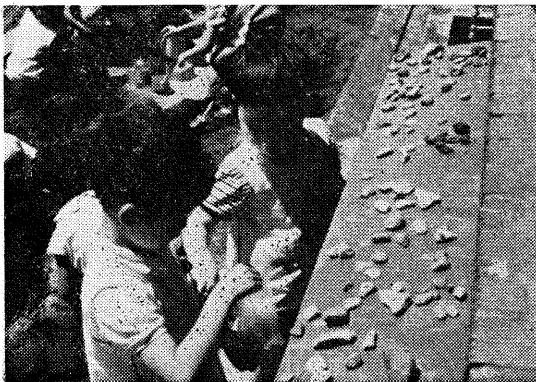
六月のはじめから、庭にしきつめてある砂利をふるいにかけて、砂と石をふるいわけて砂をばけつに入れて砂場に運んだり、小石を洗って干したり、小石をビニールの袋に入れて水を入れ、かざしてみたりなどのあそびがみられた。今朝も①、⑧、⑨がビニールの袋に小石をあつめてい

る。保育室に入っていると、先生が戸棚の奥から大きい石をいくつかだしている。そして机の上に並べる。①たちが小石を入れたビニールの袋を持って庭から入ってくる。机の上の大きい石をみて、

石を洗ってほす

⑨「わー、大きい石」  
①「どうしたの。」  
⑧「どこにあったの。」

先生「ずっと、ずっと



前に川からとってきたのよ。」

①「この大きい石、何にするの。」

先生「何かにしたいわね。」

子どもたちはあつめてきた石を大きい石のそばに並べる。

②「これ、何だか、べっちゃんこね。」

③「これ、おもしろい形」

先生「おや、おや、この石、何になるかしら。」

と子どもたちが並べた石をみる。

先生「何かかいてみたらどうかしら。」

④「何をかこうかしら。」

⑤「私たちは石を囲んではなしをしている。

先生は小石を拾いに庭にでる。

⑥「私たちはマジックを柵からだしてきて、石に絵をかきはじめる。

⑦「これ、じゃがいもよ。」

⑧「わたし、いちご。いちごって黒いボツボツがあるわよ。わ

い、おにぎりみたいになっちゃった。」

⑨「⑩は、なす、魚をかいている。

先生が小石を持って庭から入ってくる。

先生「あら、いい色にぬれましたね。」

とみんながかいているものをみる。

先生「先生は、こういう石を拾ってきたわ。」

とまわりの子どもにみせる。

先生「顔をかこうかしら。顔をかきましょう。」

とひとりごとをいいながら、マジックでかきはじめる。

⑪「させて、これ、なあに」と石をみておどろいている。⑫は皆  
がかいているのをしばらくみている。

先生「さて、これ、何にしましょうね。」

⑬「ええとね、おいにもするわ。」

⑭「私たちは、ふたつめや、みつめをかいている。

先生「できたのをどこかに並べましょうね。」

先生は子どもたちがつくった野菜や魚を別の机の上に紙をしいて  
並べる。

先生「お魚や、野菜をここに並べますよ。」とみんなにいう。

先生「こんどはクレヨンでかいてみるわね。」

⑮「わたしもやってみよう。」

⑯「おいしいものお母さんができた。」

⑰「クレヨンでぬるといいわよ。」

⑱「ここ、おみせやさんみたいね。」

先生「ねえ、いいこと考えたわ。」と、先生は色がみを小さく切っ  
て石にはってみる。

Rは大きい石に顔をかく。

。石に時計をかく。

②「Aが大きい石に数字と針をかいて時計にする。

K「せんせい、石で何かつくりたい。」

先生「どうぞ。いろいろおもしろいものができるわよ。」

先生はAが時計をかいているのをみて、

先生「あら、Aちゃんのおもしろい時計ができましたね。」



④ 「もうひとつつくろ。」

先生 「時計がたくさんできるわね。」

⑤ 「今度は何をつくらうかな。そう

だ、ケーキをつくらう。」

先生 「あら、いいですね。おいしくやいて下さいね。」

E 「これ何、これだれの。」

先生 「Aちゃんがつく

った時計よ。」

E 「ぼくもつくろう。」

先生 「何時計でしょう。」

石に絵をかいている子どもたちは六人になる。

。空箱や小石で、鳩時計や、置き時計、腕時計をつくりはじめる。

先生は空箱を持つてくる。

先生 「箱でも時計ができるわね。」

と振子時計をつくりはじめる。

T 「先生、バネをつかって、とびだすのにしたら。そうだ、先生と同じじゃないものをつくろう。」

と、Tは箱を持つてきて鳩時計をつくりはじめる。女兒たちはまた小石を拾ってきて、ドライペンシルで、石に目もりや、針を書いて、時計にする。

先生は女兒がつくった小石の時計をみて、リボンをだしてきて、腕時計にしてみる。

先生 「リボンに模様をつけるといいわ。」と、子どもたちという子どもたちが、同じ色のリボンだけをつかっているのを見て、

先生 「同じ色ばかりじゃなくていろんな色のリボンをつかったら。」と、子どもたちという。小石の腕時計がたくさんできる。

H 「先生、ぼくは、自動車みたいのがつくりたい。」

Y 「ぼくは振子の時計つくりたいな。」と、それぞれ箱をだしてくる。

⑥ 「Tちゃんのいいわね。」

先生 「鳩時計ですって。」

Tは作りかけの鳩時計を持つて、

T 「今、三時だよ。ハホ、ハホ、ハホ。」と歩いている。

先生はYの振子にするための紙を切っている。

R 「先生、もういっこつくりたいの。」

先生 「どうぞ」

Yは振子時計にするつもりで、振子をつけるところをチェーンリッブの花の形にきりぬいたのだが、文字板をかく時に箱を横にしていたので、ふりこをつけるところが、文字板の下にこないで、文字



板の左側になってしまい、振子がつけられなくて困ってしまう。先生のところについて、はなしている。

先生は箱を手にとって、考えていたが「置き時計にしたかどうかしら、ここに機械を入れて。」という。Yはほっとして時計を持つてくる。①は小石に模様をかいて、指輪をつくる。

おべんとうの時間になる。先生は「つづきをまたしましょうね。」と皆にいう。そしてYに「機械はあした入れることにしましょうね。」とはなす。

六月十日 水曜日

どくきのこをみつける。砂場に「人間の河」をつくる。

庭から山につづく坂道の段々の杭に小さいきのこがたくさん生えているのを、②たちがみつけてクラス中大きわぎになり、みんななかだして見に行く。

H「うわー、どくきのこの行列だ。」

S「どこ、どこ」

先生も子どもたちについて見に行く。

今日も石洗いはじまる。

A「Yくん、石洗いやらない。」

Y「きのこのつづき」

A「おもしろいの。」といって、バケツやふるいをだしてくる。

Hは砂場で砂を掘っている。先生も砂場にきて砂を掘りはじめ

砂場 先生といっしょに砂の人間をつくる



る。

先生「どういうのにしようかしら。」

といいながら、砂場いっぱい人間形をかきはじめる。

H「あつ、首がない。」

先生「あれ、ほんと」

先生やHの声をきいて、石洗いをしていたAやYが砂場にくる。

A「ぼく、やめた。」

Y「ぼくも、やめた。」

A・Y「先生、入れて」と入ってくる。

先生「どのくらい掘る。」

H「地球の底まで掘ろうよ。」

A「ぼく、顔を掘るよ。」

Y「ぼくも顔を掘るよ。」

KやIも入ってくる。

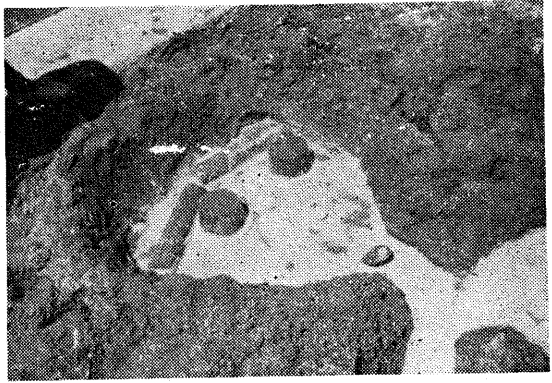
先生「みんな力いっぱい掘ってね。先生

もいっしょけん

めい掘るわ。」

H「指はどうする。」

I「指がないよ。つ



けようよ。」

K 「眼がないよ。眼がないと見えないよ。」

と、赤いばけつをふたつふせて、顔のところにおく。四人は顔を掘っている。

H 「ね、水を入れてすると、はやくできあがるよ。」

先生 「先生はかたちをつくるわね。」

I 「首のところ、だめだよ、はやく掘

れよ。」

H 「水がながれないよ。」

先生は立ち上って全体をみまわす。

先生 「あら、できたわ。上の方からみてごらんさい。できたわよ。」

H は水をくんでくる。

H 「みんなでやらなければいけないんだよ。水ってたまりっこないんだから。」

先生 「あら、足が一本しかないわ。」

H 「みんながやらないと水がたまらないから入ってよ。」

U 「みているんだよ。」

H 「だけど、みんながやらないとたまらないよ。」といいながら水をくんでいる。

丸太を鼻にして顔をつくり終り、A や Y も水をくみはじめる。水がたまりはじめ、バケツや丸太がぼこぼこ浮かびはじめる。

A 「わー、鼻がとれちゃうよ。」

Y 「眼がとれちゃうよ。」

といいながら眼や鼻をととのえる。

I 「あ、いいこと考えた、まゆげをつけよう。」と丸太を二本持つてくる。

H 「ぼたんをつけようよ。」

I 「ぼたんをつけよう。」とばけつをふせて置き、ぼたんにする。体全体に水がたまる。

H 「わー、人間の河ができたよ。人間の河」

みんな歓声をあげる。

先生 「女の人たちにもおしえてあげたら。」

H 「ぼく、おしえてくる。」と保育室に呼びに行く。女兒は保育室でおひめさまごっこに夢中になっている。H といっしょに見にくるが、すぐに保育室に入っていく。

六月十一日 木曜日

昼食後から帰るまでの遊び。

遊戯室で子どもたちが十七、八人くらいいっしょになって、魚に

なつて泳いでいる。ピアノを大きい岩にみたて、その他椅子や、平均台などもそれぞれ海の底のものにみたてる。はじめのうちは部屋中泳ぎまわっていたが、ぐるぐる走りだし、鬼ごっこになる。保育室ではおひめさまごっこをしている。庭では野球、ボールなげ、たいこ橋をしている。

六月十二日 金曜日

先生が黒板に時計をふたつく。

鳩時計、置き時計ができあがる。

腕時計がたくさんできる。

朝、子どもたちは登園すると遊戯室にかけて行く。きのうのつづきで遊戯室を走りまわっている。あたりは海で、子どもたちは人魚になっている。

先生は保育室で黒板いっぱいに大きい時計をふたつく。ひとつは数字の文字板の時計で、もうひとつは花の文字板の時計である。五才児のクラスで六月に時計をつくと数字に興味をもたない子どもがいて、時計をつくることに抵抗を感じている子どももいる。

Tが「時計のつづきをする。」といって先生のところにくる。先生は「はい、鳩時計さん」といって、Tに時計をわたす。女児が五人、机にすわって絵をかくている。となりの机にはいちごの空箱に牛乳のふたがたくさん入れてある。Hが牛乳のふたに針をかくいたり、数字をかくたりしている。

H「こんどはもううちよつと針を長くしてできあがり。もういつこつくっちゃおう。もう十二個もつくっちゃおう。」

と、ひとりごとをいっている。

先生「ええ、どうぞ、いっぱいつくって下さいね。自分のもできるし、おみせやさんのもできるし。」

とHに話しかける。Hのかいた時計をみて、

先生「腕時計、どうしましょうね。やっぱりボンをつけましょうか。」

H「どうやってつけようかな。」とかいた時計をみる。

先生「そうね、セロテーフかのり」といっしょに考える。

H「セロテーフにし

よう。」とセロテーフをとりに行く。

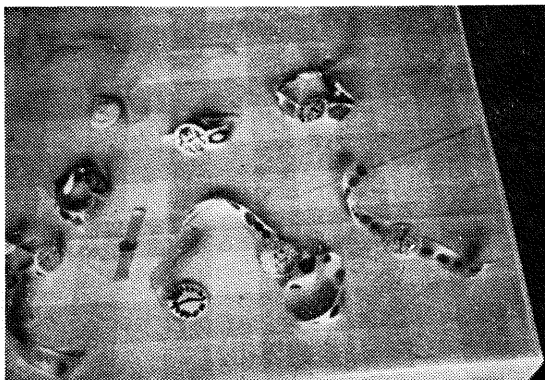
H「五時から十時」

とうたいながらつくった時計を満足げにみる。

H「そうだ、はさみを持ってこよう。」

T「鳩時計をつくったら、腕時計をつくろう。」

牛乳のふたでつくったうで時計



K 「Hちゃんみたいのつくる。」

先生 「どうぞ」

K 「六時の時は長い針はどこ」

先生 「ええとね、短い針が六で長い針は十二ですよ。」

先生は絵をかいている子どもたちにはなしかけている。

先生 「Tちゃんの時計に模様をつけたらどうでしょう。」

T 「針をつけたら模様をかこう。」

H がリボンを切ってくる。

牛乳のふたにかいた時計をセロテープでリボンにつける。リボンを腕に結ぼうとする。リボンが短くて結べない。

先生 「ゴムでつないだらどうかしら。」と考える。

H 「あーゴムがいい。」

先生 「リボンに穴があくかしら。」とリボンに穴をあけるところにセロテープをはり、穴あけ器で穴をあけて輪ゴムをとおす。

先生 「Hちゃんできあがりました。」と腕時計をHにわたす。Hは腕にしておいてみて、

H 「ちょっとゆるいくらい。」

T 「じゃ、ここをつめましょうね。」とゴムをつめる。Hは次々とリボンに時計をつけて、穴をあけて輪ゴムをとおす。

T は模様をかきはじめる。

T 「鳩をかこう、ほんとうにかこうかな、どうしようかな。ぼくの花の模様にしようかな、ぼく、ほんとうに花の模様にしよう

かな。」

とひとりごとをいいながら、HやKがつくるのをみている。鳩をかきはじめる。花もかく。

㊦ が保育室に入ってくる。

T 「㊦ちゃん、ぼくの時計」と㊦にみせる。

㊦ 「あ、鳩時計」と笑う。

T 「できちゃった。今、一時だよ。」

先生は鳩時計につけるものをさがしている。糸まきをふたつ持つてくる。

先生 「Tちゃん下につけるのがいるわね。これに色をぬったらどうかしら。」

T は先生からうけとって、

T 「針と同じ色にしようかな。」

先生 「そう、黒でもいいし、赤でもいいし」

T 「赤にしよう。」

先生はSがつくりおえた振子時計を「カチ、カチ」といいながら振子をゆらしてみる。

庭では男児が自動車競争をしている。㊦たちは子どもの家でおひめさまごっこをしている。絵をかいていた㊦たちはたいこ橋に行く。

T が色をぬりあげて、先生のところにくる。先生はどういうふうにつけようかと考える。

T 「ひっぱるのがいいよ。」

先生 「あ、そうそう、それがいいわ。」と紡績糸を持つてくる。

Tの時計ができ上り黒板のところにかざる。

①は置き時計をつくっている。

先生は「①ちゃんの台、りっぱな台にしなければね。」と台にする紙をさがす。

R「ぼく柱時計にきめた。」と黒い箱を持ってくる。

先生「その箱はくろくてみえないから、紙にかいてはった方がいいわね。」という。

Tは手を洗いはじめる。

T「先生、ピンクの石けんになっちゃった。なぜだと思う。」

H「手が赤いから、どれ、ピンクの石けん」と見に行く。

六月十三日 土曜日

望遠鏡をつくる。

四才児のクラスから月曜日に四才児のクラスで開かれる水族館の案内状と切符がとどく。

先生はどんな時計をつくろうかといろいろと考える。画用紙で置き時計をつくってみる。女兒が先生を囲んで置き時計をつくりはじめる。男児は望遠鏡をつくる。

置き時計のつくり方

画用紙を十センチ巾くらいにきる。

長い方を二等分くらいに折る。

ある一面を文字板にする。

文字板や、模様や装飾は各自工夫してつくる。

望遠鏡のつくり方

画用紙に自由に絵をかく。

まるめて筒状にする。

筒の先端に色セロファン紙をはる。

四月以来子どもたちがつくったものが、保育室の片すみの机の上に並べてある。

空箱でつくった飛行機、ヨット、自動車、起重機、

ダンボールの箱でつくった陣列台（魚屋、花屋、お菓子屋、おもちゃ屋、洋服屋）

石でつくった野菜、時計。

先生は「できたらお店屋さんにとっておきましょう。」と子どもたちという。

時計の製作中に先生が、いたり、したりしたことがら。

・柱時計を作る子どもが、振子の見える窓をあける時、箱がかたくて切りにくい場合切りはじめだけ手伝う。

・時計の針を文字板にとめる。

・空箱を使った場合、箱の 모양や広告をそのままに残しておかないで、自分で考えた模様や色をつけるようにする。

・製作をした後の紙くずなど後始末を忘れないようにする。

林の組（四才児）の子どもがふたり、林の組で聞く水族館への案

内状と入場券を持ってくる。ちょうど雨が降ってきて、庭にいた子どもたちも入ってきて、子どもたちかわるがわる案内状をよむ。

先生がまわりを片づけはじめ。

I「ねえ、先生、まだお片づけじゃないでしょう。」

先生「あのね、せっかくだけど時計をみたら、もうお片づけしなければならぬ時間なのよ。」とIに腕時計をみせる。

望遠鏡のセロファン紙がうまくつかなくて一時間近く苦心していた㊦、がお片づけになってしまい、まだできなくて、つい泣きだしてしまう。先生は㊦をなぐさめながら、手伝ってセロファン紙をはってあげる。

片づけ終って、帰り仕度をして全員席につく。

先生「ほら、こんなにたくさん時計が並んでお店屋さんみたいでしょう。きのうはふたつかみつしかなかったけれども今日はたくさんの方がお手伝いして下さったからこんなにたくさん並んだのね。まだお手伝いして下さらない方も月曜日にまたお手伝いして下さいね。ほらこんな時計もあるのよ。(と、二、三の時計をみんなにみせる。)

これは「ちゃん」のだけれど、とってもきれいにぬってあるでしょう。こういうふうにきれいにぬるといいわね。これは㊦ちゃんのだけれど犬のこんなにかわいい時計ね、おもしろいわね。」

次に林の組からきた水族館の案内状を全員に報告する。それから、時計の歌をうたって帰る。

六月十五日 月曜日

林の組の水族館に行く。びん時計をつくる。

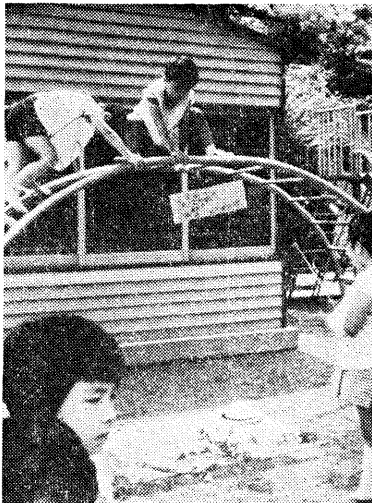
時計がつくれるように机の上にマジックやクレパスがおいてある。

砂場では男児がふたり太平洋をつくっている。砂を深く掘って水をためる。

「太平洋はもっと大きいよ。こんな河みたいじゃないよ。もっと大きくしようよ。」

「幼稚園よりも大きい」

は な や



たいこ  
橋の下で  
は花屋さ  
んごっこ  
がはじま  
っている。

㊦「先生お花屋さん  
の看板をつ

るの、紙をちょうだい。」

先生「あら、いいことを考えたわね。じゃ㊦ちゃん、ここにかいたら。」と、ダンボールを切つて、㊦にわたす。㊦は上からつるせるようにしようとする。

先生「上からつるすの。いいことを考えたわね。」

と先生も手伝つて穴にひもをとす。

㊦「先生、『な』はどうかくの。」

先生「あー『な』という字はね、こうかくのよ。」と別の紙にかく。

㊦は『おはなやさん』と看板にかく。

㊦は紙にマーガレットやすずらんの花をかく。

㊦「お花がこれだけあるっていうのをかいたの。」と先生のところに持つてくる。

㊦は看板をつくりあげて庭にて行く。

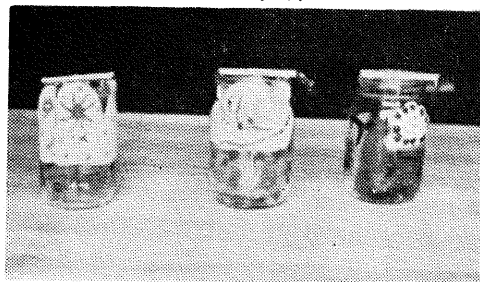
先生は㊦の看板をみて。

先生「あら、きれいにできたわね。」という。

## びん時計

先生はマヨネーズの空びんに模様をかいている。㊦もびんをもつてきて、模様をかきはじめる。先生はびんに合わせて割り箸を切つてびんにわたし、振子をつける。

びん時計



㊦もびん時計をつくりはじめる。㊦は人形の振子をつくる。人形にひもをつけて上からぶらさげる。

先生「あらお人形が空からぶらさがっているみたいね。ぶらんこにのせてあげましょうか。」と、ぶらんこをつくる。でき上つて、びんをもって、ゆら、ゆら、ゆらさせてみる。

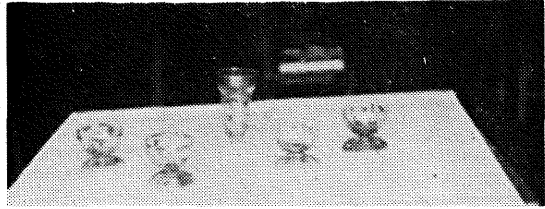
林の組から水族館の案内がくる。「やーまのくみすいぞーかん」と皆うれしそうに、それぞれ遊んでいたところから集まつてくる。先生から水族館の切符をうけとつて、みんなそろつて林の組に行く。林の組では保育室の壁にそつて水族館ができています。中ほどの広場に魚つりができるように箱つみ木でつりぼりができています。紙でつくつたいろいろな魚が入れてある。あみとつり竿が置いてあるが、五才児にとつてはつり竿でつる方がおもしろいらしくあみですくつていた子どももつり竿のあくのをまっています。

六月十六日 火曜日

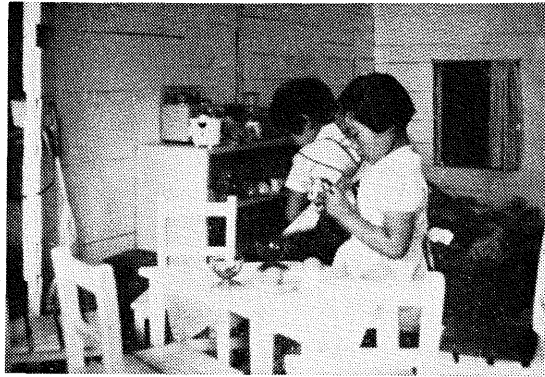
アイスクリームのカップに模様をかいて、ままごとあそびの道具にする。

㊦がアイスクリームのカップに、模様をかいている。㊦もきてかきはじめる。㊦はままごとあそびに入つたままで今、おつかいでかけたところである。かきおわると、ままごとコーナーに行き、「いいものがありましたよ。」と皆にみせる。「ふたもできるし、コップにもなるのよ。」といいながら模様をかいたカップでさかんにお客さんをもてなす。

アイスクリームのうつわに模様をかく



もようをかいたうつわをままごと道具にする



ガラス時計が机の上にかざってある。④はガラス時計を両手にだいてみていたが、「つくりたい。」といってガラス時計をつくりはじめる。⑤もつくりはじめる。

十一時十五分に集まって遊戯室に行きスキップをする。

六月十九日 金曜日

毛虫、大きい時計をつくる。

朝のようす

くみ板

二人

自由絵

四人

飛行機とばし

二人

大積み木

五人

すべり台でままごとあそび

四人

花屋さんごっこ

三人

ぶらんこ

二人

ひとりで庭を歩いている

一人

先生は花びんの水をとりかえたり、透明ないちごの空箱に水を入れて花を浮かべたりしている。④がすべり台をやめて、保育室に入ってくる。先生が花を浮かべているのをみて、

④「先生、どうするの。」とたずねる。

先生「茎が枯れたので茎を切ってお花を浮かばせるの。」という。

④「お花が泳いでいるみたいね。」

といいながら、④は先生のそばにきて花を水に浮かべてみる。

先生は絵をかいている子どもたちに

先生「いっしょうけんめいかいているのね。」と声をかける。

T「お魚をかいているの。」

先生「あー、そうそう、お魚の本があるわよ。」と本を持ってくる。

H「お魚の本をみせて。」と、Tのところきて絵をかく。

しばらくしてTが先生のところに行く。先生に何かいわれて、ま



たかきはじめ。魚だけをかいていたが、こんどはまわりをぬりはじめる。Tはまた絵を持って先生のところに行く。

先生「ああ、こんどはお水があつていいわね。」と、いつてTの絵をみてTとはなしている。

### 。毛虫

Eが毛虫をつかまえてくる。

E「先生、毛虫をとったからびんをちょうだい。」

F「これ、ほんとうのちょうちよになるんだよ。」

⑤「もしかしたら、黒と白のなるのよ。」といっている。

先生は子どもたちの声をきいて保育室からでくる。

先生「かわいがってあげましょうね。ごちそうもいるわね。」

といいながらびんを取りに行く。

KたちはEがとってきた毛虫をみて「おい、みんな、こういう毛虫をみつくてこようぜ。」といって一団となって走って行く。先生は「ほんとうはみかんのはっぱがいいのね。さて、何のはっぱがいいかしらね。はっぱを探してきましょうね。」といって子どもたちといっしょにはっぱをとり庭にでる。しばらくして木の葉をとってきてびんに入れる。びんの中の毛虫をみて「おうちに入ったら長くなって遊んでいるわよ。びんからでないと思うけれどもでもないから」といってガーゼを持ってきて輪ゴムでとめる。

H「あした、みかんのはっぱを持ってこるね。」

先生「おねがいね。」という。子どもたちは毛虫を囲んでひとりひとり夢中になってはなしている。

「うしろは、とんがっていいないよ。」

「もう、さっきより大きくなっている。」

「ちょうちよになったらきれいだろうな。」

「ちょうちよになったらにがしてあげるけれどな。」

「そうだけれど、林の組に見せなければ。」

「ほんとうのちょうちよは青虫からなるんだよね。」

「もつと見つけてこようか。」

「おい、みんな、バトンを置いていこうぜ。」

子どもたちは走って毛虫をとりに行く。

Kたちが遊戯室の裏庭で直径一センチ、長さ五センチくらいの大きな虫をみつける。腰をかがめてやっどの思いで保育室の近くまで運んでくる。Kたちが大さわぎをしていると、クラスの子どもは勿論のこと、庭にいた他の組の子どもたちも多勢集まってくる。

「ぼく、蛾だと思っけれどな。」

毛虫がおちないようにはしてつかんで



「うしろの三角をみてくれよ、ちょうちようになると思うな。」

「先生を呼んでくれよ。」「ここが武器だぞ。」

「もしかしたらもんしろちょうになるかもしれないよ。」

子どもたちが虫さわぎをしている間に、先生は、つくりかけの時計を机の上にだしたり、空箱を机の上に置いたり、戸棚から紙をだしたりする。子どもが「先生、大きい虫を見てちょうだい。」と先生を呼びにくる。

「先生、今、くるってき。」

「これ、ずいぶん重いよ。」

先生が保育室からでてくる。あまり大きい虫なのでおどろく。

先生「それ、何の虫でしょう。」とびっくりして虫をみつめる。

「うしろがとんがっているから蛾だよ。」

「ひとりずつ並んで。」

子どもたちが多勢集まっけていて虫が見えない。

「先生を呼んできたからのいてくれよ。」

「男ばかりじゃいけないんだよ。女の人にも見せなければ」

結局、Kは虫を桜の木にのぼらせる。子どもたちはしばらく虫を見あげている。

。大きい時計をつくる

虫騒動のあと子どもたちはみんな保育室に入ってくる。⑩は空箱でカメラをつくりはじめる。Eが「大きい時計をつくりたい。」という。先生は、物置きに箱をさがしに行く。

先生「Eちゃんさがしてきたわよ。」と大きいダンボールの箱を二

つ持ってくる。

E「あつ、ふたつつくろう。みんな、はさみを持ってこい。はやく、まずこれからつくろう。」

とちよつと小さい方の箱をだきあげる。

先生「ここからはさみを入れるといいわ。」と箱に穴をあける。

E「ようし」といきこむ。

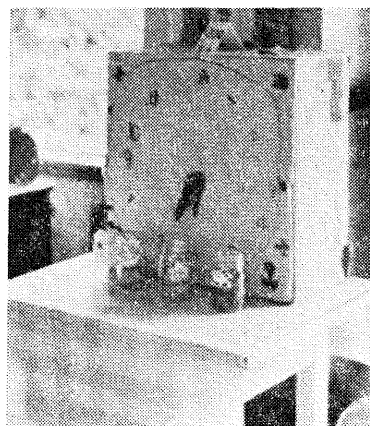
先生「みんなでもよく相談してつくって下さいね。」

男児7人がいっしょにつくりはじめる。

「おいそうだんしよう。」

「色はぼくがぬるよ。」

先生はダンボールにはる紙をさがしている。振子をつけるところをきりぬき、ふりこ針もできる。いよいよ文字板に文字を入れることになる。先生は文字の位置に鉛筆でしるしをつける。



先生「字でも、字でなくてもいいけれども、字をかくなら、順番になくてはね。みんなでもよく相談しながらかいてちょうだい。」

(つづく)



# のりものはくらんかい

岩井富枝

## ◇クラスの概況

二年保育年長組 男子二十名 女子二十名

このクラスの子どもたちの家庭環境は、工場地帯を近くに控えての住宅地のために、サラリーマン家庭が大半で、電車や、学園バスで五分から十分位かかって通園している子どもたちで占められている。従って幼稚園生活も、自然、同方面のバスに乗って通う子ども同志が結びついて遊ぶということから出発していった。四才の頃までは、数人の仲の良い子ども同志が、好きなことをして遊ぶという形で、毎日がくり返されていたが、五才になって、多勢で遊ぶことの楽しさが分るようになってきて、友だち関係次第に広がってきたようである。

## ◇思いつきのきっかけと経過

十月のある日、木片を拾ってきた丁君

が砂場で、それを電車にして遊んでいた。校内で建築があり、そこから拾ってきたという。なるほどそれらの木片は、生きた電車となつて数人の子どもの心を奪っていたようだった。

次の日M君が、「僕のはもっと長いんだ」といって、木片を片手に、いそいそと登園。(この頃年長のカリキュラムの中に、木工製作をしてみようという計画もあつて、一応ノコギリや、金槌などを部屋に用意してあつたので)私が、それにちょっとノコギリで先端を切つてあげたら、それが子どもの興味をそそつて、夢の超特急の創作に入つていった。

次の日、板・木片・釘と、ホツリホツリではあるが、材料が集まつて、子どもたちはつくつては、マジックやラッカーで塗り、あちこちに釘が打たれたりして、次から次へと電車が誕生し、庫、信号機(三つの信号は、ボール紙のさし込みで色が変わるように大工さんにベニヤ板に穴をあけてもらった)も木片でつくられた。今までは、木片にマジックで色を塗る程度に終つて、それに釘を使うとか、切るとかの経験がなかったために、新しい興味として、子どもたちの創作意欲をかきたてたらしかった。

又一方、組板で自動車をつくつたりして、しばらく、自動車や、電車あそびが雑然とではあるが、遊びの中で行なわれていた。その中では、積木で道路が組立てられたり、トンネルなどもできているが、一部の子どもの参加に終つてしまう。特に女の子にも、その方

への興味を向けさせてあげたいと思い、ある日空箱を机の上でいじりながら女の子をさそいこみ、一緒に自動車を作ることができた。

女の子も男の子たちが作った高速道路に、それを走らせてみるおもしろさを味わうことができたようだった。男の子は、ブルドーザーや、レーシングカーをつくりだし、いろいろ乗物がおもしろく工夫されてきたので、のりものについて皆で話し合う機会を持つてみた。

のりものには、自動車、電車その他、飛行機、船、それにロケットまで、子どもたちの乗物へのあこがれは、こちらで想像する以上のものだった。自由あそびの中で、三枚の模造紙を貼り合わせて、空、陸、海へわたつての、のりものについて、共同画をかいてみた。男の子が高速道路を画面一杯にかき、女の子は箱根で見たというケールカーをかこうとして、お山をかいた。

その時、子どもたちがお互いに話しながら生まれたものに、ジャングルがあつた。飛行機が海を越えて、ジャングルの方まで飛んで行くという。Y君が昨夜テレビで、ジャングルに住むライオン、ピューマなどのことを見たといつて、私に一生懸命話してくれた。そこでジャングルもかけるようにスペースをもうけた。みんな意外と、ジャングルに熱中した。高速道路からタワーも見えたし、いろいろなビルも見えたと、それらもかかれた。海には、船の他に港もかかれた。空には、ヘリコプターや、ジェット機の他に、人工衛星もとんだ。画面いっぱい、余す所なく、子どもたちの夢がかかれ

た。それを壁に貼ってあげると、みんな、お弁当を食べながらも、その話にはながされた。

翌日、ダンボールの箱を広げて敷いて、そこにラシャ紙で木を植えて、子どもの登園を待った。初めに入ってきたNさんYさんは、「先生これなあに!」と不審そうな顔、「ジャングルを作ろうと思うのよ!」と誘いかけて木を植えるのを手伝ってもらった。次々に部屋に入ってきた子どもは、カバンを降すと、のぞきにきた。色紙をまるめたりして、小さな木もたくさん植えられた。「僕はライオンをつくるよ!」「私は兎よ」などと、へびやしまうまなども画用紙でつくられた。動物が立つようにするためにもいろいろと工夫され、紙をまるめて、足をつける方法を教えてあげたら、首の長いキリンや、ゾウもそれらしく生まれた。皆でそれに絵の具で色をつけ、ジャングルにおいてみたら、まるで動物の国のようになった。一方ダンボールを積み重ねて、皆で包装紙を貼り、色を塗って山をつくった。そこには、ミカンやリンゴの木が植えられ、オオカミなどの動物も同居していた。そんな山にケーブルカーの駅を箱でつくって、すえつけた。

空箱と、ストローなどで作られたケーブルカーは、屋根の上につけたストローの間に、子どもたちで糸を通すことを考えた。二人で糸の端を持ち、片方が椅子に乗って高くし、一方はしゃがむと、ケーブルカーがいかにも動いているようである。

それを、いくつもつくって、それだけで遊ぶ日もあったが、それを山につけるには、どうしたら良いかと数人の子どもと考えてみた。Y君が糸まきを使って、山と下の方の駅をつないで、こちらで操作する方法を考えだした。しかし実際、考えたようにやってみたが思うようにいかないで、何度も何度もやり直しながら、一応一人でも動かせることができるようなのが工夫された。

皆がつくったケーブルカーを、全部動かすのには、重さのために糸が下って動かせないで、二つつけることを納得させるのにも大変だった。皆が、でき上ったケーブルカーを動かすのに、げんかになってしまふ位だった。山は、毎日の遊びで傾いては直すのに一苦労だった。

ガソリンスタンドは、糸巻と、ストローでタンクがつくられ、道路のわきに置かれて、ガソリンを入れると又走った。今度はお金を払って、ガソリンを入れてもらうことを思いつき、牛乳瓶のふたのお金で、女の子が油を入れてあげる役になったり、それだけでも結構楽しいらしかった。お菓子屋さんも、スタンドの横につくられたりした。

こういう建物については、みんな子どもたちと一緒にもう一度考え合ってみることにした。自分の住んでいる近くにどんな建物があるかと――工場、病院、学校、幼稚園、デパート、お店屋、郵便局、消防署……いろいろとだされた。これらをまとめながら、子ど

もたちにも、それらの建物の中で、どんな仕事をしているか、なぜな形式で簡単に説明した。子どもたちのだしたこれらのものは、社会の一部分にすぎないが、まだまだいろいろな建物があり、その中では、世の中のために、多勢の人たちが働いていることも、勤勞感謝の意味などもあわせて話したりした。

こうしてできた建物を、六つとり上げて、子どもたちで好きなものを共同でつくることにしてみた。幼稚園、学校、お菓子屋、港、飛行場、デパートが、大小さまざまなボール箱などを持ち寄っては、子どもたちが考えながら一つ一つできていった。こういうグループでの製作を通して、今まで割合無口だった子どもも、独りあそびの好きな子どもも、つくりながら、塗りながら、友だちと話したり、考え合ったり、又仕事をするためにグループの仲間を呼びに行ったりしながら、交友関係も目立って広がり、深められていったようだった。

幼稚園は綿で砂場をと考えたり、屋上に芝生の遊び場ができた。お花のトンネルがあったりして、みていて子どもの夢を感じさせられた。デパートはエレベーターが工夫され、一階から十階までつぐられ、それぞれの階で売られているものが絵で示されているもので、子どもらしい見方でつくられていた。飛行場はちよつとむずかしいらしく、箱のフタを敷きつめた滑走路がそれらしくできた。飛行機は、小箱でつくられておかれた。お菓子屋は、庭までついた

家ができて、こまごまとお菓子が並べられてあった。港の方は、この頃、燈台記念日があり、歌もうたったり話も聞いたりしたので、子どもたちは、どうしても海に燈台をつけたいといい、港にそれがとりつけられた。大きな船は、はしけに毛糸で繋がれた。海はラシヤ紙でつくった。クレヨンや、絵の具で、波や、魚がかかれた。遠足で水族館を見してきた経験も手伝って、クラスの皆が海に関心を示し、大ガメや、サメなど好んでかかれた。

又、図鑑を見ながら、セロファン紙にマジックで、魚や海の生物をかき、廊下の透かしガラスにセロテープで貼ったりした。一方、画用紙でつくった魚の口の辺に穴をあけて、ヒゴを折り曲げて釣るあそびも生まれたりした。

#### ◇隣の組を招く

こうして海も賑やかになり、隣の年少組の人たちも盛んにのぞきにくるようになると、自分の組だけのこつこあそびに飽き足らなくなって「先生、小さい人たちに僕たちのつくったものを見せてあげようよ」と子どもたちの中から声がでた。そこで、みんなで他のクラスの人たちを招待するのには、どうしたら良いかと話し合ってみた。ちよつと二週間位前に、松の組（年長組）で動物園をして招いて下さったこともあってか、子どもたちの中から、用意する看板や、切符なども作らなければと意見がだされた。さて、何といつて

招いて良いか子どもたちと相談することになった。「自動車ショーがいいよ」「そんなのおかしいな。電車もあるし……」等々、「交通博物館にしたら」の声がでた時、S君が即座に「交通博物館で、乗物がいっぱいあって、古い汽車もあったし……」などと見てきたことを細かに話してくれた。しかしどうも、それには内容があてはまらないし、結局、のりものはくらんかい、にまどめてしまった。

最近文字も大分読めるようになった子どもたちは、のりものはくらんかいがいつ開かれるとか、いろいろかいたポスターをだした方がいーいといーだす。そこで林の組で十一月六日、九時三十分から開かれるということを、あらかじめ私がまとめてかき、子どもたちはそれを見ながら、県命にマジックを握って、絵のような文字や、乗り物の絵を入れながら、ポスターや看板をどんどんつくった。それに、入場料は大人五十円小人三十円も加えられた。ポスターは二十枚かいた。

又、せっかく皆を招待するのだから、お土産をあげたいとの意見もでて、いろいろ考えたが、先日文化の日に菊の花のペンダントをつくって遊んだのがとても気に入っていたので、それをみんなできくってあげることにした。色紙と牛乳瓶のふたと毛糸でつくるペンダントは、それから大変忍耐のいる仕事だった。何しろ一人が十個つくることになり、子どもたちはあと何個だと数えながら県命につくった。入場券は、子どもたちがかいた下絵をもとにして、こちら

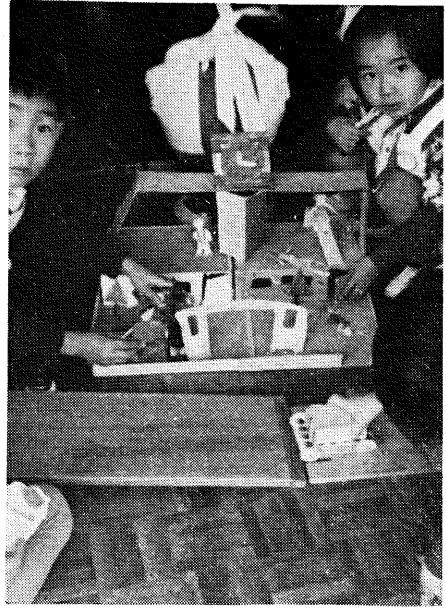
で刷って用意し、看板二枚も、みんなでかかり、入口と部屋の中に紙テープでつないで貼った。前日は、子どもたちで高速道路や、山のトンネルからでた線路などいろいろ組合わせながら、又つくった建物も並べてみたりして遊んだが、一度にみんなが手をだすので時間の都合でまともにくく、結局、私の意見が大分入ってしまった。

子どもたちが見易いようにすることが第一なので、子どもたちが帰ってしまった後、ベニヤの細長い板なども大工さんにもらったりして、子どもたちの意見も生かしながら、私が並べ変えてみた。当日の役割は、子どもたちとどんな役が必要かを話し合い、希望させることにした。

いよいよ当日、絶好の秋日和、子どもたちは勢い込んで部屋に入ってきた。そして、私が一応いろいろの製作物を並べておいたので、その中をキョロキョロ嬉しそうに歩きながら、自分の作った自動車はどこへいったのかなと探していた。ポスターは、子どもたちに、他のクラスの子どもたちの見易い所に貼ってきてもらった。

九時になると、もう入口に年長組の子どもたちが、自分でつくった紙のお金を持って並んで「早く開けて」と大騒ぎ、年少組にも、ポスターが貼られたと、そのうちぼつぼつ小さい組の人たちも集まってきた。開場までの三十分間は、とても気ぜわしかった。

四十名のクラスの役割は、券を売る人四名、切符を売る人三名、信号機係二名、ロープウェーの操作する人二名、案内する人十三



名、レコード係二名、お土産を渡す人七名に位置についてもらった。案内する人だけに、紙でつくった腕章をつけて、見物にきた人たちにすぐ分るようにした。レコードは、国際急行列車を時々かけては、それに合わせながらロープウェーを動かすことにした。

### 九時半開場

入ってきた人たちは、ロープウェーの方に気をとられて、うっかりシグナルの赤に変わったのを通り過ぎようとして注意される場面もあった。ほとんどの年少児は、細かい建物などに注意しないで、ロープウェーの動くのに興味を示すが、自分が交差道路の下をくぐっ



たりするのに気を奪われた形で、お土産をもらう方に一生懸命の様子だった。そこで、案内係に少し説明をすることを頼んでみた。子どもたちは、自分たちの作ったものをわかってもらおうとして顔を火照らせながら説明に県命だった。年長児の場合は、割合良く見ていて飛行場の批判や、東京タワーのエレベーターを見つけ、動かさせてなどの注文までだったり、作られた自動車にも手を触れてみたくて……というように反応が強かったようだった。途中希望で、役割も交代してやったりした。こうして九時半から約一時間に渡って張り切った子どもたちは、皆が帰っていった後で「くたびれちゃったけど、とてもおもしろかったね」ときさやき合っていた。





#### ◇その後

それらの乗物は、子どもたちで存分に遊ばれ、海は積木で囲ったりして、磯釣りがはじめられた。いつのまにか、釣りやさんごっこが子どもたちの間に盛んになっていった。

#### ◇感想と反省

「のりものはくらんかい」を通し、みんなで協力してつくる機会や、話し合いの場が多く持たれたりして、自己主張の多いこの時期に、協調してあそぶことのおもしろさを、子どもたちなりに理解できるところになったし、今までの割合少人数的グループでのあそびから、クラスの中の一人という自覚へ、さらに発展して、幼稚園という大きな集団の中の一人ということが理解されてきた。又自分の身近なものを見つめて、理解しようとする芽生えが育ってきたことは

収穫だったと思う。

何しろ予想以上にいろいろと発展して大きくなってしまったので、十六坪の保育室と三坪の廊下では、子どもが充分活動するには少し狭すぎた感じで、もう少し発展することを目指して場所を選定しておいたら、実際に組板でつくった大きな乗物を走らせるとか、交通のきよりとかをもっと大きくとり入れたものができたのではなかったかしらなどと反省している。

(洗足学園幼稚園)

### 幼児の教育 第六十五巻 第三号

三月号 © 定価六〇円

昭和四十一年二月二十五日 印刷

昭和四十一年三月 一日 発行

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

編集兼 津 守 真  
発行者

東京都文京区大塚町三五

お茶の水女子大学付属幼稚園内

発行所 日本幼稚園協会

東京都板橋区志村町五

印刷所 凸版印刷株式会社

東京都千代田区神田小川町三ノ一

発売所 株式会社 フレーベル館

振替口座東京一九六四〇番

◎本誌御購読についての御注文は発売所 フレーベル館にお願いいたします

# 画期的な フレーベル館の 園児用肌着



発売

**フレーベル館**

子どもの肌着はおとな以上に大切です。

子どもは運動が激しいので真冬でも汗をかきます。そこで伸縮性吸湿性に富んだものが望ましいわけです。どんなにあばれてもお腹が出てこないもの、体の動きに無理なく軽くなってくるもの、その他にもヒフに密着するのですから肌ざわりが良い、激しい洗たくにも丈夫である、保温性があり、衛生的などが条件になりましょう。

最近では子どもの下着類もどんどん改良され品質も良くなってきましたが、同時にレースや薄いナイロンの飾りが、やたらに多いのも目立ちます。

肌着だけはその役割を考慮して実質的なものを選びたいものです。

フレーベル館の園児用肌着は、現代っ子の体位と生活を調査して望ましい肌着の条件をすべてそなえています。

- ・ラグラン袖と長い丈は、どんな活動にもスムーズです。
- ・パンツの止めは、ゴムより丈夫なスパンデックスで、お腹にくいこみません。
- ・高級綿糸のフライス編みですから、伸縮がよく吸湿性に優れています。
- ・不必要な飾りや絵柄はつけず、すべて実用的に考えてあります。

男児用 1セット(シャツ・パンツ) <sup>3~4歳用</sup><sub>5~6歳用</sub> 共 400円

女児用 1セット(シャツ・パンツ) <sup>3~4歳用</sup><sub>5~6歳用</sub> 共 400円

\*シャツ 250円 パンツ 150円





# 幼児を育てる3つの柱

- ① 幼児に ▶ **キンダーブック**
- ② 家庭に ▶ **ホーム キンダー**
- ③ 先生に ▶ **フレーベルの窓**



4～5才用 4月号  
“みんななかよく” つばめのおうち、工作付録付  
A 4判 16頁 60円



4月号 特別付録付  
L判 24頁 40円



5～6才用 4月号  
“さくら” つばめのおうち、工作付録付  
A 4判 16頁 60円



4月号 特別付録付  
L判 24頁 40円

キンダーブック（ホームキンダー共）100円

キンダーブックは年齢別  
四～五才用 二冊発行  
五～六才用 二冊発行  
園と家庭を結ぶ新しい雑誌ホームキンダー創刊

フレーベル創